

放送人の会

No.77

2017.2.17

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、

菅野高至、逸見京子、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一

事務局 須斎恵美子

「ラスコー壁画」と「君の名は。」

放送人の会 会長 今野 勉

2月某日、午前中に「ラスコー展」、午後には「君の名は。」を見た。2年前にクロマニヨン人がフランスのラスコー洞窟に描いた人類初の絵と、最新のアニメーション映画を見比べて、発見が一つ。動物の後ろ脚が3本描かれているのは脚の動きを表そうとしたのかも、という解説に「そうか。ラスコー壁画はアニメーションの始まりだったのか」と思ったこと。それはさて置き、感慨は別のところにあった。

1. リアリズムと呪術

ラスコー洞窟には、マンモス、ウシ、ウマなど数百の野生動物が描かれている。クロマニヨンは狩猟民族だった。彼らが動物の絵を描いた動機には諸説あるようだが、私は呪術説に共感する。獲物がたくさん捕れるようにと動物の絵を描いて呪術をかけたという説だ。動物の絵は全体として非常にリアルに描かれているが、かなりの割合で頭が小さく脚が細く描かれている。賢い動物は人間を出し抜く。だから頭を小さく描く(賢くならないように)。逃げ足の速い動物の脚は細く描く(逃げられないように)。絵にはこうあって欲しいという狩猟民族クロマニヨンの願望が込められている。リアルに描こうと思えばリアルに描けるが、こうあって欲しいという願望を描くのが呪術の呪術たるゆえんだ。

2. ジャーナリズムと呪術

洞窟壁画を見ているうちに、私の連想は思いもかけない方向へと向かった。イギリスのEU

離脱やアメリカ大統領選におけるトランプの勝利のことだった。

なぜマスコミの人たちはEU離脱やトランプの勝利を見抜けなかったのか。その理由をフランス人類学者エマニュエル・トッドはこう語っていたと思いついてきたのだ。「ヒラリー・クリントン氏は白人の死亡率が上昇する米社会で、実態とはかけ離れた理想を語った」「トランプ氏が勝つたのは『真実』を語ったからだ。」※1

「クリントンの理想」は、ラスコー壁画の「小さな頭」や「細い脚」。つまり、こうあって欲しいという願望、すなわち呪術であるということだ。ある新聞記者はこう認めている「トランプ大統領を見たくなかった」。※2

ジャーナリズムはいつの間にか、こうあって欲しい」という「呪術」になってしまったのか、というのが「ラスコー壁画」を見ながら私の感慨だったのである。

ただし、心情的には、私はクロマニヨンの呪術に共感するところもある。壁画という呪術は、クロマニヨン人に自信と勇気を与えたに違いないのだ。しかし、現代ではそうもいかないのだろう。ある識者はこう警告している。「読者にとつて『見たいものだけを見る』装置となったとき、メディアは自滅する」。※3

確かに、クロマニヨンは絶滅した。

一方、「君の名は。」を見た後、私はわずかに救われた思いがした。映画自体は映像的によくで

きた映画だとは思ったが、それほどの大感動、大感涙というほどでもなかった。だからこそ逆に「なぜこのアニメ映画がこれほどの観客動員を成し遂げたのか」を知りたくなった。人々の心を惹きつける大きな力をこのアニメ映画は持っているのに、試写会を見た何百人というマスコミ関係者も作つたスタッフ自身もそれを見抜けなかった。スーパードットコンピュータにどんなビッグデータを集積しても人々の心の内を読むことはできないようなのだ。そう思うとなぜかほっとする。

※1 毎日新聞(16・12・15)

※2・3 朝日新聞(17・1・21)

【脚本アーカイブズシンポジウム2017】

脚本アーカイブズ・デジタル活用の未来

～デジタル脚本と映像を共に楽しむ方法とは～

2017年3月9日(木) 13時半～17時 (於: 早稲田大学小野記念講堂)

第1部トークショー 池端俊策、岡室美奈子

第2部パネルディスカッション

今野勉、福井健策、高野明彦、丹羽美之、吉見俊哉

入場無料・申込先: <http://www.nkac.jp/>

主催: 日本脚本アーカイブズ 後援: 放送人の会

年頭所感

一番 藍沢幸久

この覽で初めて書かせて頂く、会員名簿順位一番(アイウエオ順)の藍沢幸久と申します。放送の世界に入ったのは制作プロダクションイーストで、TBS「時間ですよ昭和元年」久世光彦氏演出のADがスタートです。以来44年、今も放送界の片隅で細々と仕事をしております。さて、小・中・高・大・専門学校何れも卒業成績一番の記憶無く、下位に甘んじておりました。その私が「放送人の会」名簿順位一番(アイウエオ順)です。とはいえ、本当に一番で宜しいのでしょうか。一番の記憶は、小学校時代運動会の徒競走とリレーでの一番。更に中学生になって野球部に入部、サウスポーで一番レフトの打順のみです。以来、今日まで一番の記録無しで過(こ)して参りました。

ある日の制作番組放送後、社内で視聴率表を持ったAD君が走って来ました。「横並び一番です!」横並び一番とは、各局の放送時間帯を横から一列にして視聴率を比べる事です。(皆様)存知かと思ひます。横並び一番の視聴率は、プロデューサー、制作スタッフ、出演者全てを一瞬にして笑顔にさせます。そうか、今年も頑張つて横並び一番を取る事が出来るならば、「放送人の会」名簿順位一番(アイウエオ順)でも良いのではな

いか?と思ひ元氣になりました。本年も皆様の「多幸を祈念致しまして、ご挨拶とさせて頂きます。」

漱石のころ

相田 洋

最近読んだ本を紹介します。赤木昭夫著「漱石のころその哲学と文学」(岩波新書)です。日々腐敗するいっぽうの明治の元勳達が、自分たちの造り上げた無責任な政治体制を通して、日本をあらゆる方向に進めようとする姿を漱石が想像を絶する苛烈な言論弾圧の網をかくくつて書いた風刺小説。それが「坊ちゃん」。英国留学でスイフトに刺激を受けた漱石が、当時の政治状況を強烈に風刺した作品だったというのです。

日露戦争後の世相に危機感を感じた漱石は「三四郎」のなかの登場人物に「この国は亡びるね」と言わせ、亡国の予言は太平洋戦争における敗戦で現実になりました。この本の「あとがき」で著者は、日本の敗戦について次のように書いています。「これは無謀きわまりない日本近代史の縮図だ。そうした経過のなかで、無謀を顧みなくなる変曲点、歴史の曲がり角は1904〜05

年の日露戦争と、それに続く軍備拡張だった。満州事変以降はその繰り返しだった。その禍根となつた曲がり角において『坊ちゃん』と『ころ』は書かれたのだ。そして、平成の現代は2度目の変曲点ではないかと警鐘を鳴らすのです。著者に言わせれば、国の在り方やその結果としての運命を測り、それを作品の中に通底させるのが作家であり、不幸なことにそのような作家は漱石以外に存在しなかつたし、現在も存在しないと断じます。

そして著者は、漱石がそのような危機感を持つに至つた経緯を克明に辿り、数々の一次資料で論証していきます。それはまぎれもなく調査報道「漱石の思想と方法」です。漱石をそのように研究し、論じた先人が皆無だつたことに著者はいら立ち、これまでの漱石研究者達の怠慢無能ぶりにについても容赦ありません。「漱石のころその哲学と文学」は現代と闘わない言論人をも連想させる、まことに迫力に富んだ論文でした。

「破獄」

池端 俊策

年末にテレ東の仕事をしました。吉村昭の「破獄」です。ピートだけが看守で主役です。どうなりますか。また一案内いたします。

祖父の日記

井上 佳子

あけましておめでとございます。昨年は、1938(昭和13)年に中国で戦死した、私の祖父のドキュメンタリー取材に没頭した一年でした。私の祖父は、死の直前まで日記を書いており、

中国にその軌跡を辿りました。今年2月11日の民教協スペシャルで放送されますので観ていただければ嬉しいです。取材は、証言者探しから始めました。祖父の所属した第六師団第十三連隊の戦友会の名簿をもとに、750人に手紙を出したところ、150人ほどの遺族から返信がありました。しかしその多くは「もう亡くなつてわからない」「生前、戦争の話をしなかつた」というものでした。結局、日本でこの戦争を知る当事者に会うことはできませんでした。祖父の戦争は79年前のことですから当然と言えば当然かもしれませんが。一方、中国では、子供の頃にこの戦争を体験し、記憶する十人ほどの人たちに会うことができました。でもいづれにせよ、もっと早く取り掛かるべきだつたという思いは最後までつきまといました。

祖父の日記の存在を知つたのは私が大学生の頃以来、祖父の日記に向き合うことは私の人生の大きな課題でもありました。今回番組を作つたからと言って、特別すつきりするとか、何かが昇華されるとか、そういうことはありませんでした。今年はこの番組をもとに本も出版することになっていきます。今後も祖父の戦争にしっかりと向き合っていくつもりです。今年もよろしくお願ひいたします。(熊本放送)

「北斗」ある殺人者の回心

岡野 真紀子

昨年は、大山勝美賞を頂き、大変幸せな1年となりました。受賞パーティーや、先日の懇親会では、幼い頃からテレビでお名前を拝見していた大先輩方から、お祝いの言葉や激励の言葉を頂戴し、ますます制作意欲が湧きました。

2017年3月25日から、WOWOWにて「北斗ある殺人者の心」を放送致します。脚本・監督は瀧本智行さん、主演は中山優馬さんで挑んだ作品です。制作に至るまで、約3年を要した作品です。最近、企画開発から撮影、放送まで時間がない作品が多い中で、じっくりゆつくりしつかり制作出来たことはとても幸せでした。本作は、瀧本監督から原作を読んでほしいと渡されたのがきっかけでした。原作を読んだ時、2010年に石橋冠監督と一緒させていた「なぜ君は絶望と闘えたのか」を制作させていたからこゝろ、この「北斗」を創りたい！そう強く思いました。なぜならテーマは、「なぜ孤独な殺人者が生まれてしまったのか」だったからです。「なぜ君」とは真逆の視点で残酷な犯罪を捉えることが出来た作品でした。

テレビのプロデューサーとして、常に自分の中に「なぜ君は絶望と闘えたのか」を制作したことが原点となっており、それが小さな勇氣になり、自信にも繋がっていることを実感しました。改めて、「テレビドラマ」を創ることは、流れ作業でもなければ、コンテンツ作りでもなければ、枠を埋めることでもなく、わが子にもなる「作品」を大切に創り上げることなのだと思感した瞬間でした。作品は世の中にも、誰かの心にも、自分の心にも残ります。だからこゝろ、真摯に丁寧に向き合っていきたいと思い、今年の抱負と致しました。

地球を抱きしめて

……たたいま世界旅の途上

北出晃

放送人の会の立ち上げ当初から、会員にさせ

ていただいております。しかし、「思いは日々の仕事の中で実践している」と屁理屈を付けて、集まりには顔を出さず20年。幽霊会員を続けてきました、不肖のやからでございませう。思っ所有り。3年程前に現場を離れ、連れ合いと二人で世界旅を初めました。これまで、延べ500日ほどになっております。

旅の記録を書きながら、乗った飛行機、鉄道、バスの路線、そして5回のクルーズの航路を描いてみると、一つのフレーズがこぼれ出ました……「地球を抱きしめて」。この言葉は、アメリカの歴史学者、ジョン・ダワーが書いた「敗北を抱きしめて」第二次大戦後の日本人」という本に由来します。

「敗北を抱きしめる」とはなかなか分かりにくい、矛盾した表現に思えるかもしれません。しかし、避けることが出来なかったが故に、それを抱きしめざる事によって日本人は自己変革をし、「抱きしめた敗北から新たな未来を創造」した。ダワーはそう言うのです。同様に私たちも「地球を抱きしめて」いるうちに、実はそれは私たちが「地球を抱きしめられて」いる。「世界の人々に抱きしめられて」いる事と同じなのだと思ふに付いたのです。そういう関係性、「つながり」の中で、「人間の幸福」「人類の未来」について無意識のうちに感じ、考え始めていたのではないかと思います。

「新しい世紀において、日本は何を目標とし、何を理想として抱きしめるべきか?」「世界に争いは絶えないが、分かり合える道はあるか?」。旅がままならない世界にだけはなつて欲しくないし、絶対にはなりませぬ。私たちは、また明日(1月7日)から旅に出ます。皆様がこの文

をお読みになつていらっしゃる頃、ベトナム北部のディエンビエンフーから山を越え、ラオス北部に入っています。そこは、ベトナム独立、ラオス独立のフランスやアメリカとの戦いの地です。

という事で、まだしばらくは、不肖の会員を続けさせていただくことになりそうです。とはいへ、先日初めて、飲み会と言われる集まりに顔を出し、充分楽しい思いをさせていただきました。ことを告白し、厚くお礼を申し上げます。追記・旅のブログを立ち上げています。

<http://chikyu-taki-shine.blog.jp> 「世界旅・地球を抱きしめて」(umiyama2017)

是非お読みいただき、お知り合いに広げて頂ければ幸いです。(元NHKプロデューサー) *****

北村充史

西(とり) 十五支の第十番目

TOPY(「トリー」) 英国・カナダの保守党員

「鳥」(①D・デュー・モーリア作の短編小説

②A・ヒッチコック監督の映画(①原作

取り(最後に出演する者、または出しもの)

鳥居(神社の入り口、姓氏のひとつ)

鳥雲(渡り鳥が北へ去るころの曇り空)

鳥辺野(京都市東山区の清水寺から西大谷辺

酒(西(しゅ) + サンズイ(したたる))

あけましておめでとございませう

坂元良江

昨年は、春にコレクティブハウジング研究会を立ち上げ、夏には7人の仲間と一緒にスウェーデンへ行き、私が住んでいるコレクティブハウスかんかん森がお手本にしたフェルドクネッ

ペン、スウェーデンで一番新しいソフィエルトなど9か所の多様なコレクティブハウスを見学してきました。私は冊子づくりや報告のイベント開催など忙しく過(こ)しました。

3月に長く担当した番組「課外授業 ようこそ先輩」が終了しました。番組を愛してくださった方々、お世話になつた方々にお礼を申し上げます。

今年もよろしく願ひいたします。

年始の「挨拶は……

佐々木光政

喪中のため欠礼致しました。寒中御見舞いを申し上げます。入会から3年が経ちました。私は東日本大震災の時務めていたNHK福島局長を6年前退任して、現在、関連会社の現場で「BS世界のドキュメンタリー」日本語版制作のプロデューサーをしています。この番組は海外で制作された優秀な作品を正しい日本語でわかりやすく紹介するもので、普段のニュースや日本のマスコミ取材で掘り起こせなかつた事実を数多く提示して、さまざま分野の皆さんから、必見の番組として好評をいただいております。

さて入会当時、放送を取り巻く状況に危機感を持ち、いくらかでもお役に立ちたいと考えたのが2014年2月、ちょうど前のNHK会長の発言が大きく報道された時期でした。その体制もこの正月、新しい陣容に変わりました。この3年、放送人の会では総会や授賞式、シンポジウムなどに一会員として出席しました。また会員親睦を目的とした場に顔を出しています。中でも、西川章理事が世話役をしている「放送人句会」では、それまで知らなかつた各局の番組制作出

身者と知り合えたことが、大きな財産になったと感ずります。この場をきっかけに始めた俳句が面白くて、すっかり嵌まってしまったのも楽しかった次第です。今後も自分の仕事と、話題の番組の視聴をきちんとやるのは当然のことですが、この会を通して、他の組織の人とのつながりをもっと深めていきたいと思ひます。私、昨年母を亡くし新年らしいご挨拶は出来ませんでした。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

重延 浩

時代の歯車が未来に向かっているようでも、人間の精神はむしろ逆行しているのではないかと錯覚することがある今日このごろです。

私の敬愛するステイブ・ジョブズは「コンピュータというものは驚異的だが、感動そのものではない。私はコンピュータを使って、感動的なことを生み出したのだ」と言って早逝しました。とても良い言葉を残してくれたと思ひます。私も創造的な新発想で人間のための未来に参加したいと思つております。

新しい年が素敵な日々になり満ち満ちていきますように。

明けておめでとつございませう

鈴木嘉一

昨年7月、『テレビは男子一生の仕事 ドキュメンタリスト牛山純一』が平凡社から刊行されました。日本のテレビドキュメンタリーの開拓者として知られ、放送界に大きな足跡を残した故人の評伝です。ありがたいことに、毎日新聞や朝日新聞「週刊読書人」「放送レポート」「ギネ

マ旬報」などの書評欄で取り上げられました。

書き下ろしの『校守三代』が収録された光村図書出版の中学生用教科書「国語1」は、2016年度から使用されています。主人公の佐野藤右衛門さんとの対談（光村図書のホームページにアップ）を頼まれ、久しぶりに晩秋の京都を訪れました。

私事では、母の随想集づくりに取り組みました。佐野さんと同様、米寿を迎えた千葉・房州出身の母は筆まめで、里山の暮らしや女学校時代、戦争体験の回想、エッセイ、短歌などをあちこちに投稿、寄稿してきました。それらをまとめ、私家版にして2月に出版します。妻の菜穂子は「大人の塗り絵教室」の講師などで忙しそうです。昨秋には長女香奈子が結婚し、家族が一人増えました。

今年は、新たなテーマのノンフィクションに挑みます。お互いに、いい年でありませうように。

（今年は牛山さんの没後20年です。）

70過ぎの子育て日記・その14

杉田成道

一道、15歳、有、13歳、窓子、9歳、実、
みり

9か月。

3月×日。午前5時15分。「オギャー」と一声、女子誕生。駆けつける自転車に空を見上げれば、西に満月いまだ残り、東に赫々と太陽昇りけり。すは「蒼穹の昴」か？天命、この子に降りしや？と、ひとり悦に入る。

72歳。西洋占星術によれば、一生に一度の天中殺。我が人生、この辺が潮時？と覚悟しおしり所。死ぬつもりが、生まれてしまった。上原謙を

超え、チャップリンと並んだという。「ここまで来たら、もう一人産め！」と、外野席から一声。なるほど、生んでギネスを狙うのも一興と愚妻に問ひし所。「もう、アカン！」との事。ご期待の向きには残念至極ではございませうが、これにて打ち止めということでご勘弁を願ひます。

×月×日。ミックジャガー、73歳にして8人目の子ども誕生。我と同じ歳。上には上があるものだと感嘆しおる所。あるパーティーにて、「よおッ！、日本のミックジャガー！」と大向こうから声が掛かる。穴があつたら入りたい。

10月×日。愚妻、大病院を辞め、近所にて小児科を開業。「お父さん、もう歳だから、いつまでも当てにできない」。気持ちは判るが、借金まみれなり。

12月×日。赤ん坊、40度の高熱を發して入院。原因不明の川崎病という。ぐったりした赤子を抱き、「死ぬな、死ぬな」と囁く。宮沢賢治の『永訣の朝』が浮かび、「雪をとててけんじや」とつぶやき、涙する。

人間、生死を分かちものは何か、老いゆく日々と思う。「人生流転、万物止まる所なし。73にして4人の子持ち、未だ乳飲み子をかかえ、黄昏に立つ。」

本年もよろしくお願ひいたします。

あけましておめでとつございませう

塚原あゆ子

第一回 大山勝美賞 をいただいてから、
「私、結婚できないんじゃないかと、しないんです」「重版出来」「砂の塔」知りすぎた隣人」と3本連ドラを作りました。受賞の時に石橋監督にいただいた言葉を胸に、いつもどうしたらテ

レビと視聴者を近くできるかを考えながら制作しています。

年始に取材で、仕事をしていて楽しいことは何ですか？という質問をされて、難しいことと苦しいことはすぐに思ひつづくのに、その答えだけするりとは出ませんでした。

何かを創るときに、いつの間にかしめつ面で作っていたのだなど、反省しました。

毎日に追われても、生み出すことに必死になつても、余裕がない人には面白いものは作れない。

本年は、出来るだけ楽しんで仕事ができますよう、精進しようと思ひます。

また、年末にお酒の会があつたのに、参加できず非常に残念でした。

本年は必ず参加したいと思ひますので、また開催してください。（下リマックステレビジョン）

鶴橋康夫

木枯らしの耳飾りして千秋楽
『後妻業の女』お騒がせしました。下高井戸シネマで無事、千秋楽（12・9）を迎えました。いつか、また、きつと！
せつちかちの中のせつちかち春田打つ
よい年でありますように。

物語について考える

中島由貴

昨年は、放送人の会から身に余り過ぎる「大山勝美賞」を頂き、有難う御座いました。もう全く若くない年齢ですが、大先輩方に囲まれるとたの小娘の様な気持ちになります。そして、小娘

のフリをしなごらどこまで思い切ったことがやれるだろうか、と図々しい妄想に耽っております・・・。

年末年始、あるテレビドラマに嵌りました。

「GAME OF THRONES」というアメリカのHBO制作のダークファンタジー。とある番組の撮影前、参考になるかもと薦められた時は、スタッフルームにあった第2章のDVDをさらっと見ただけでしたが、VFXも含めたプロ作業が続く中、何故かふと続きが気になり、つい手を出してしまいました。お陰で、アマゾンの購入ボタンを押し捲り、第6章まで一気見、朝になつちやつたこともしばしば。右肩上がりにストーリーがパワーアップ、息を飲み続ける展開に唖然愕然。世界市場で勝負するドラマというのはこういうことか！と10tハンマーで強打されたような感覚でした。「物語は人類が生きていく上で必要なものである、だから無くならない」ある本の中で語られたこの言葉を、「GAME」を見ながら嘖み縮めた次第です。

最後に、時既に遅しという感じではありませんが、NHK総合1月21日から放送しております「大河ファンタジー 精霊の守り人II 悲しき破壊神」の演出をしております。2（放送済）、6、9（最終）回です。本年も宜しくお願い申し上げます。（NHKエンタープライズ ドラマ）

「今日はハグの日」

中町綾子

昨年の11月の火曜日のことだ。大学図書館のカウンターの女性からふいに声をかけられた。

「先生、今日はハグの日ですよ！」

「ですねえ」と二人で笑う。

「ハグの日」と言えば、ドラマ「逃げるは恥だが役にたつ」（TBS、10月〜12月放送）だ。契約結婚をする主人公夫婦（新垣結衣&星野源）が、火曜は「ハグの日」と決めていた。

ドラマを共通の話題に心地よいやりとりだった。楽しめるドラマが増えれば、こんなふうなかわい日常のやりとりも巷にきつと増えるはず。ちなみに、このドラマ、みなさんご存じの通りいろいろな楽しみがあった。エンディング曲の逃げはビダンスは言うまでもない。私はと言えば、石田ゆり子演じる主人公のおばのフアンションをチェックした。彼女のしていたロングパールネックレスを物色してしまつた。登場人物もいろいろだつた。結婚願望のある人、ない人、ないけど結婚しちゃう人、離婚した人、ゲイの人……。

テレビドラマは、今でも（？）時にそこそこのブームを生む。それは、テレビドラマが何か大きなひとつのものをつかめたからではなく、いろいろなものをつとつに詰め込めたからではないだろうか。

そんな器の大きなテレビドラマが今年も生まれることを、期待しています！

年頭所感

深尾隆一

放送人の会の一會員として、また新人會員として所感を記します。

この一年は新聞とTVを代表とする既存メディアがその存在意義を賭けて踏ん張らなくてはいけない年になると思います。

アメリカにおいて新大統領と既存メディアとの確執は激しくなっています。トランプ氏は「メ

ディアは野党だ」「メディアは嘘つきだ」と公言し、そのメディアと直接向き合う報道官も同様です。さらにこれまでと異なる点は、ツイッターを通じてその見解を利用者に直接語りかけていることでしょうか。

驚くべきことはこれに同調する人々がかなりの割合でいるらしいことです。選挙結果が如実に表しているように、トランプ氏は確かに多数の支持をとりつけたのです。

多くの人が指摘するように、ヒットラーが台頭する時期のドイツの状況と似ている点もありそうです。「この閉塞状況を打ち破るには生ぬるいやり方ではだめだ。メディアは我々の言葉を代表してくれない。」とでもいう大勢の人々の感情でしようか。日本の昭和初期にも似たような状況があつたのではないかと思います。

しかし当時、現在のアメリカで始まっているメディア側の公然かつ大規模な反対の声がドイツや日本であつたとは寡聞にして知りません。

選挙で選ばれたナチス政党は形式的には正当に独裁制を獲得するに至りましたが、その過程で反対の声を上げることがはやメディアには出来なかつたのでしよう。その結果は無惨でした。

もちろん現在のアメリカにこの歴史的事実をあてはめることは出来ませんが、過去に学ぶべき点は大いにあります。メディア側の反旗は民主主義の先進国たるアメリカならではのことでしよう。民主主義が健全に機能する為には構成する人々の知識の厚みと正当な批判精神が不可欠です。ここでの踏ん張りは既存メディアの踏ん張りどころだと思つたのです。

ただメディアにとつてもうひとつの、そして最大の問題は、ソーシャルメディアの存在です。

既存メディアを敵にまわしたトランプ氏は、ソーシャルメディアを支持者に直接訴えかける新たなメディアとして位置づけています。支持者にとつては「既存メディアのフィルター」を過ぎずに彼の見解に触れることが最大の魅力です。ヒットラーが演説に長け、映像でのプロパガンダの重要性を明確に認識して行動していたように、トランプ氏はソーシャルメディアの価値を充分に生かしているようです。

してみれば、私達は尚更ソーシャルメディアの利用方法について慎重にならざるを得ません。そしてマスメディアとしてソーシャルメディアとは異なる役割を再認識して行動せざるを得ません。放送人としての私の現役時代の仕事は、専ら娯楽番組でした。ジャーナリズムはどちらかというとその訓練を積んだ仲間にかかせておこう、という考え方だつたと思います。その私が今言うのもおこがましいのですが、マスメディアの抛り所は、

- 1、事実のみに依拠すること。
- 2、記名性。発言にたいして常に責任の所在を明らかにすること。
- 3、絶えざる検説。自らの過ちを正す勇氣を持つ事。
- 4、弱者への配慮。

と思つています。以上はソーシャルメディアに欠けているかあるいは不足している要素だと思つています。ソーシャルメディア自体の健全な発展を促す為にも、既存のマスメディアは長年培ってきた力と信頼の源泉を再認識し、これらを抛り所とし、そのことよつて新たな信頼を勝ち得て行く必要が今こそ求められていると思つたのです。

この一年は何か雪崩をうったように動き出す年になりそうです。その中で冷静でいられる様に、放送人の会の一員として諸先輩の意見も耳を傾けて行きたいと思えます。

新入会員の年頭所感

藤田久久

「放送人の会」の会員になって初めて迎える新年です。先輩会員の方々は、真正正銘、放送業界の功労者揃い。38年間、制作会社CALに勤務して、その内30年『水戸黄門』の制作に携ったことだけが足跡の私にとって、入会が叶ったことは身に余る光栄です。

私はテレビ放送が開始された昭和28年生まれです。幼稚園の時に風邪で寝込み、両親がテレビを買ってくれました。長じてよく考えてみると、両親自身が欲しかったというのが本当のところだと思えます。映像にハマる入口が、私の場合、映画ではなくテレビだったことは言うまでもありません。以来約60年、制作者としてのキャリアよりはるかに長い間、熱烈な視聴者であり続けています。昨今巷で盛んに囁かれている「テレビがつまらない」の声……「だつてどこを観ても同じもんばっかり！」という明解な解説まで付くようになってしまいました。一視聴者として甚く同感であります。

振り返ってテレビ全盛の時代：放送各局はそれぞれ放送番組に個性を有していたと鮮明に記憶しています。即ちそれぞれが「独自の顔」を持っていました。それが現在では「似たような顔」ばかりになってしまった。極論すれば他局で当たったものの後追いをお互いに繰り返している内に「どこも同じような顔」になってし

まったのではないのでしょうか。これは深刻な問題です。改善しなければいけません。一番大切なお客さんが嘆いているのですから。

実はその改善に必要な重要なヒントが「放送人の会」にはふんだんに存在しています。日本の宝の山です。先輩会員の皆さんの実績こそが、視聴者をテレビに釘づけにした「局の顔」を作っていたのですから。入会できて本当に幸せであります。

乱世の時代

前川英樹

「サンデーモーニング」(TBS)で、姜尚中氏が「ルネサンス以後の世界の転換点」という発言をしていた。全く同感。トランプ現象はその分かりやすい例だと思ふ。

何が起ころうとも不思議ではない。人はこういう時代の厄災から逃れる知恵を持ち合わせているかと言えは、樂觀的になれる理由はどこにもない。「見るべき程の事は見つ」とは平家物語の平知盛の台詞だが、それほどの見切りの感覚はもちろんない。この台詞は「もはや自害せん」と続くのであって、そうはいつても自害するわけにも行くまい。ただ、しっかりと見るべきものを見る。ことだけが、私たちの仕事であろう。

謹賀新年

村上雅通

地震は大地、家屋、そして人の心に多くの傷跡を残しましたが、周囲の温かさが傷を癒し、勇気を与えてくれました。

助け合うことの素晴らしさを、改めて実感する日々でした。大学の方は、4月にスタートした

新学部の舵取りに追われ、試行錯誤の毎日でしたが、なんとか方向性が固まってきました。

2回目の入学試験を控え、どんな新入生が入学するのか楽しみで。

長崎の生活もあと2年、そろそろラストスパートの段階に差しかかっています。

63歳にして新たなチャレンジを始めます。乞うご期待！

寒中御見舞い申し上げます

吉村泰介

会員の皆様お元気に新しい年を迎えられたことと存じます。

私こと、縁あって自分では奇縁だと思っておりますが放送人の会のお仲間に加えていただいたNHK・OBの吉村と申します。現在、「放送人の証言」プロジェクトの撮影・音声を担当しています。ここで、実際の収録の手順をご紹介したいと思います。

機材一切を乗せた「大古車」を運転して、撮影の1時間前には赤坂のオフィスへ。これは原則ですが、カメラ、アンプ、マイク等をセットしてインタビュー本番を迎えます。インタビューアーは会員の大ベテランたち。およそ2時間の撮影、収録を終えて、忘れものをせぬよう気をつけながら機材撤収。再度運転して自宅へ。緊張していたので相当に疲れます。翌日、カメラ内HD Dに収録された映像・音声をDVDに移行。内容を表示したラベルを作成。ケースに収めて完成！という手順なのですが、どうもキカイに弱くて、毎回「取・説」と首つ引きで四苦八苦しなからどうやら納品？しているという状況です。しかしながら、NHK時代には、まずお眼に掛

かる機会がなかったであろう民放の方々の風貌に接し、親しくお話を伺うことができるといのが最大の役得！ではないか、と考えています。

昨16年秋には、映画「後妻業の女」を演出された鶴橋康夫さんのインタビューを撮りました。聞き手は堀川とんこうさんと工藤英博さん。エネルギーシユな応答が興味深く、予定の2時間が短く感じられました。

プロジェクト担当の隈部理事から頂いた年賀状に「今年は何少収録がふやせよう」とありましたが、どんな方にお眼に掛かれるか楽しみです。その為には各種機材に慣れる、習熟する必要があると心を新たに新しい年を迎えました。

私のまさかと、世界のまさか

渡辺純史

私は、今年の夏で73歳となる。59歳の時、胃の4分の3を切除したが、その後も以前の食欲を維持し続け、昨年正月の日記に「我にまだ伸びしろあり、眼前にある老人の坂は、明治開化期の青年よろしく、遙か坂の上の雲を目指して歩む、上り坂である」と大言壮語した。自分の未熟さや経験知見不足をあえて逆手に取ったもの物の言いだ、己の頑丈さは信じてもいた。しかし昨年、何回か体調を崩した挙句、思いもかけぬ胆管結石による入院によつて日韓中フオラム不参加を余儀なくされるなど、我が上り坂も怪しくなつたかと、些か意気消沈し、自らに命じ、今年の正月は節制して過ごした。正月が過ぎ、17日の夜である。観ていたドラマの中のセリフが、私の耳に残った。「人生には三つ坂があるのを知っていますか、一つは上り坂、二つは下り坂、そして三つめの坂は、まさか

かです」。TBSのドラマ「カルテット」第1回、松たか子のセリフである。人生三つの坂の話は、世の中何が起きてても不思議じゃありませんよとの意味で、かつて小泉元首相が喋って話題になった冗句だが、脚本家坂元裕一のセリフは、若者4人が織りなすドラマの今後の展開を示唆し、人生の摩訶不思議さを上手く表現していて、私は妙に得心した。もちろん、昨年来のイギリスのEU離脱、トランプ新大統領の出現など、まさかまさかの世界情勢を連想させたことも、得心の理由であった。

久しぶりに面白いドラマに出会い、封印されていた酒が体内に注がれ、結石は『まさか』であって、我が老人の坂が下り坂になったわけではないと、酔いに任せて気分は昂騰した。しかし、我が胆管結石は正直に反応した。胆汁を確保するために体内に残したチューブが、なんと外れかかり、痛みと熱をもたらしただ。緊急入院し、さっそく体内のチューブを取り替える手術が行われ、状態のおさまりを待ち、改めて中に詰まった石を取り除くことになった。点滴のチューブにつながれ、今度こそ、私は観念し、病室に持ち込んだPCで改めて我が病気を調べ、医師の説明をじっくりと聞いた。

医師の見立ては、4分の3を切除された私の胃は、60代はともかく、70代となれば加齢による内臓筋力の劣化によって変形が進み、各消化器官の連携を悪化させ、消化能力は著しく減退し、消化しきれぬ養分によって過剰に生成されたコレステロールが胆管内で石化し、胆管を詰まらせ、胆汁の出を阻害し、胆管、胆嚢、肝臓、膵臓の炎症によって、さまざまの病状が現出する。また、変形した胃は内視鏡を胆管まで届かせ

るのを難しくしており、胆石除去の手術はそう簡単ではない、とある。(とおりで、私の内視鏡手術には、多くのインスタン達が見学していたっけ) それにしても「まさか体が石ができるとは思いませんからね」と言い訳すると、「病気には、まさかはありません、理由があつての結果です。どうして70を過ぎた立派な御老人が、肉体の劣化、老化という現実を見ようとしなのですか」と、孫のような若い医師から叱られ、病室に居合わせたいた姪どもにも笑われた。

次の21日、例のトランプ大統領就任の翌日だが、朝日新聞の「わたしの紙面批評」が目に残った。東京大学教授、宇野重規氏は「朝日新聞を含む多くのメディアは、なぜ米大統領選におけるトランプ氏勝利をなぜ読み誤ったのか。そこには『見たくないものは見ない。できればなかったものとする』という心理が働いていなかったのか。胸に手を当てて、もう一度再考すべきだろう」

——私の肉体の劣化、老化を直視しない心理を連想したが、肝心の要点は以下の部分にある。「今や人々は既成のメディアよりは、ソーシャルメディアの言説に信を置く。いくらメディアが虚偽と批判しようが、よくない話あつてほしくない話については、人は、冷静に直視せず、そんなはずはない、そうであつてほしくない、人々はトランプ候補のツイッターでの発言の方を信じるのだ。むしろメディアを既得権層とたたくトランプ候補に拍手喝采する人々がいる。これはメディアにとつて悪夢といえる事態である」(実際に就職以来、国境の壁の建設やアラブ諸国からの入国禁止など、常軌を逸したとも見える大統領令を次々連発し、国内外から抗

議を受けるトランプの支持率は、一時、就任時の40%から、逆に50%に上昇している。

そういえば、学生時代に同じ活動をしていた同級生とメールのやり取りをした際に、君らみたいな「上からメセンのメディア育ちのわかつたような口ぶり」には付き合いきれないと、私自身、批判されたことを思い出した。もう3年前になる。トランプ現象をポスト・トゥルース時代のポピュリズム云々と後説として分析して見せるだけでは、事態は『まさかまさか』のこととして放置されるだけだろうと、私自身、大きな危惧を感じていた次第である。

氏はさらに、「メディア(新聞、テレビという既存のメディアといつていい)が、『社会の木鐸』を任じるのであれば、人々が何を信じるのか、その社会的メカニズムが基本的に変容していることを認めたい。それで存在する『信じるに足る真実』を、人々に納得してもらえよう、客観的根拠を以て示すことではないか。そしてこう結ぶ。「その前提を疑い、『見たいものだけを見る』装置になった時、メディアは自滅する」と。ちなみに編集者が記事につけたリードは、現実的に「目をつぶる」報道の危うさ、とある。

しばしの時間、私は病のことを忘れ、いくつかの新聞を買い求め、ひまな入院時間を充実して過ごすことができた。

——そして、最後は私事に戻るが、こんなことを思っていた。

来年の正月の日記は、こう記してみよう「我が眼前にある老人の坂にまさかはない。来たり来る下り坂を、また見ぬ現実の景色を楽しみながら、ゆるゆると降りて行こう」と。

第43回 名作の舞台裏

三匹のおっさん

(テレビ東京、2014年1月〜第1シリーズ、2015年4月〜第2シリーズ、2017年1月〜第3シリーズを放送)

日時 2月19日(日)午後3時半〜6時半
場所 イイノホール

ゲスト 北大路欣也(出演)

泉谷しげる(出演)

志賀廣太郎(出演)

猪原達二(監督)

井上龍太(制作・ホリプロ)

山鹿達也(制作・テレビ東京)

渡辺紘史(放送人の会)

司会

● 定年退職後、近所のゲームセンターに再就職した腕に覚えありの剣道の達人キヨ、こと清田清一(北大路欣也)、同じく武闘派の柔道家で、居酒屋「酔いどれ鯨」の元亭主シゲ、こと立花重雄(泉谷しげる)、機械をいじらせたら無敵の頭脳派、愛娘にはめっぽう弱い機械工場経営ノリ、こと有村則夫(志賀廣太郎)。かつての悪ガキ3人が結成した私設自警団「三匹のおっさん」。詐欺んび痴漢に動物虐待……。三匹が町内の悪を斬る!

入場無料 会員で参観ご希望の方は放送人の会事務局へご連絡ください

放送人グランプリ下馬評座談会

―恒例のグランプリ下馬評座談会をお届けします。同封した放送人グランプリのノミネート用紙に書くための参考になさってください。今回ノミネートの締め切りは3月15日です。いつものようにA、B、C、D、とあるのは段落記号のようなもので特定の発言者を示すものではありません。―

A まず総論から行きましょうか。今年には熊本地震、リオ五輪、小池都知事、トランプ大統領といろいろあるが…

B イギリスがEUを離脱、トランプの大統領就任は今の世界を象徴する出来事、流れた。それは、一つにはポピュリズム、民主主義が生み出す極めて歴史的な問題であり、またはグローバルイズムと保守主義の問題であり、またはマスメディアとSNSのからむポスト・トゥルース、本当かどうか検証できないがそれを信じてしまう、という問題だ。それらの問題にメディアがどれだけ取り組んだかと、最近のドキュメンタリー作品をみると、歴史的な素材を扱うか現在の人間模様をドラマと同じように扱うか、あとは海外を扱ったもので政治、経済といった人間社会全体に影響のある問題に四つに組んだものはほとんどない。それは何故か。歴史的な素材を取り上げて現在の闇を撃つのはドキュメンタリーにとって極めて大切なことだが、歴史的な素材は塩漬けされた素材だ。一方現在の素材は変動している。歴史を扱うには歴史家の視点、素材を料理する名コックの技量が必要だが、現在を扱うにはハンターの能力が必要だ。ドキュメンタリー作品を見て行くと、歴史や人間模様を扱ったものは作品の出来、芸術性が高く、現在の血の滴

るような素材を扱うものは荒っぽく芸術性が乏しい。しかしジャーナリズムとしてみると、やはりトランプ現象、ポスト・トゥルース、ポピュリズムの問題などに取り組まなくてはジャーナリズムとして欠落している。表彰する作品を選ぶには完成度は劣っている問題に取り組んだ作品を選びたい。かつて放送人グランプリで表彰した19兆円予算の使い方を扱った番組は、災害にかこつけて現在の官僚が国家のお金をいかにごまかして使ったかを調査報道で暴いた。いま、トランプ現象や保守主義を撃つ本格的に取り組んだ番組はないのか。

C 昨日、たまたま永井愛の「ザ空想」(東京芸術座、二鬼社公演)を見た。テレビの報道番組を扱った芝居で、終わったあとに金平さんが出てきて永井愛と30分ほど対談した。これは放送人の会の人に是非見て欲しい。劇はまず総務大臣のスピーチがあり「権力はいかに報道に介入しているか」というスペシャル番組を作ったチームが登場する。プロデューサー、ディレクター、編集マン、局長、アンカーなどだ。そしてこのスペシャル番組がぐずぐずになって行く過程を描いている。バランスを言うアンカー、企画意図を通したいプロデューサー、自分の将来を心配するディレクター、そんな人たちが会話の中で「戦略

的妥協」と言いながら番組はぐずぐずになり、最後にプロデューサーが8階から飛び降りるが死なない。非常にタイムリーな劇でよく取材し、まく劇にしている。面白いのだけど芸術性となるとちよつと荒っぽいんじゃないの、と言いたくなる。帰るとき永井さんに「面白かったよ」と挨拶すると、「こんな作品は人生のあわれとか、ニヒリズムとかを描くものの下にみられますね」と言っていた。右派、国家主義の政権はトランプより日本の安倍政権が早い。表彰の選考に当たっては、そんなところにも我々の目が及んでいると表現したい。

D 「ザ空想」は超人気でチケットは全くとれない。あの劇はテレビでは不可能だろうか？

B 不可能だ。永井さんは私出版として劇を録画しているそう。それをNHKに売り込んだがダメだった。劇場中継もダメらしい。

D アメリカ大統領選はCNNでみていたが、予備選のときからどんどんひきつけられた。いまもCNN対トランプは続いているがアメリカのマスコミと政治の緊張感に興味深い。日本には政府とジャーナリズムの緊張感はあるのだろうか。昨年は国谷裕子さんをその意味で推したのだが、メディアはだんだん骨抜きになり、死んだふりをしていたら死んじゃったという状態になりそう。

A そのことは永井愛さんの芝居では「大人の対応」という言葉で出てくる。大人ぶっているとやられる。突出していると危ないと戦略的に大人の対応をしていると根こそぎそっくり持っていかれてしまう、と言っている。

B 安保法制はあれだけデモをやったのにいつ

の間にか忘れられている。

C 東日本震災は時代のメルクマールとなる大災害だが、高齢者には昭和が終わったという実感が強い。時代をどう感じて作られた作品かという点を考えたい。

A 話は変わるが、今年度になって4Kで作った番組が放送に出てきた。これまで受像機が高くて普及せず番組の制作もなかなか本格的な取り組みがなかったが、最近では「ブラネットアイズII」(NHKBS・12・27放送)が4Kのカメラ40台を使った。迫力は凄いい。ロングの迫力は圧倒的だ。あの番組では野生の猛獣の映像を全く自然のままに撮影していて、テレビの新しい魅力ある世界だと思った。4Kの映像はダウンコンバートして画質を少し落としても綺麗に映る。今店頭で4Kの受像機は10万円前後になってきた。

B 放送はもう始まったの？

A CSで1昨年からはBSで昨年からは開始した。民放でも始めた。

C 8Kも始まっている。千代田放送会館の中で実験放送の映像が見られる。

D ケーブルテレビは4Kで撮影して4Kで放送している。BSの4K放送は来年の12月以降だ。その免許が先日正式に決まった。いま放送でみられるのはダウンコンバートしたもので4K放送ではない。来年からNHKは4Kと8Kでチャンネルが二つ増える。高市総務相はその分免許を減らすと言っている。その前提で今回の4K免許決定だ。

A いま、実験放送をやっている、本放送のためにコンテンツを蓄積しているところだ。

【ドキュメンタリー】

D 今年度は時代の趨勢に突っ込んだ、あるいは告発するドキュメンタリーがない。民放はやってはいるのだが、選ぶとなるとNHKの番組しかない、という声を聞いた。トランプの独善的孤立主義が蔓延し、不寛容が広がり、ポスト・トウリス、オルタナティブ・トゥリスと称する事実より心情を重視する風潮が蔓延している。そうした風潮を追及し批判するドキュメンタリーがなかった。そんな中で注目したのはNスペ「象徴天皇模索の歲月」だ。この番組は8月8日の天皇の言葉の裏付けドキュメントだが、注目されずに退位問題は矮小化されている。

A 天皇の退位の意向の発言は「私を形式だけの元首にはしないでくれ」と言っているのだと思ったが……

B あれは天皇の人間宣言だろう。象徴としての役割はやるが、人間としても認めてくれと言っている。象徴天皇制の矛盾を衝く国民向けの仰天すべき当事者発言の筈だ。なぜもっと騒がないのだろうか。

C 「人生フルーツ」(東海テレビ昨年・3・20放送)の評判がいい。放送文化大賞グランプリだ。ドキュメンタリーはここへ逃げ込んでいるのだろうか。政治状況とは関係のない夫婦の物語だ。時事性はないが完成度は高い。

D 「原発に一番近い病院」(NHK・Eテレ・10・8放送)に心うたれた。100人の入院患者を抱えた81歳の老医師がひとり、行政は助けられない。番組は静かに進行するがはらはらする緊迫感がある。年末、病院の隣の自宅から出火、この高野院長は焼死する。災害復旧費の予算が余っているというのに、何故この病院を助けられ

ないのだろうか。

A 番組は2回再放送され、反響も大きくて、一時的に若い医師がフォロワーすると、テレビ朝の「報道ステーション」が取り上げていた。

B 原発問題を扱うのは難しくなっているのだろうか？

C やる連中はいまも追いかけている。東京電力も作業の状態を隠さない。十分とは言えないかもしれないが取材は続いている。

D 「それでも生きようとした」(Nスペ・1・9放送)では近くまで帰ってきて昔ながらの暮らしをたてようとした農家の若い夫婦が、元気にインタビューにも答えていたのに自殺した。福島の上昇を淡々と語って怖くなっていく作品だった。

A 「アマゾン最後の秘境」(Nスペ、4・10、5・8、6・12、8・7放送)はかつての川口浩探検隊を思いだす秘境もので、「ヘーっ」と驚きながら見た。

B 取材班はアマゾンに命をかけている探検のプロのチームで、前に「ヤノマミ族」を撮った。第2集の「ガリンベイロ黄金を求める男たち」では取材班(P・国分拓)は50日原住民に食事をわけて貰いながら密着取材している。震災後は南相馬に入って地元に残る若い人たちの絶望的なニヒルな生態をよくぞここまでと思えるほど取材している。(2012年放送)膨大な震災後の取材の中で唯一署名性を感じた作品だった。

C 「ある文民警察官の死」カンボジアPKO 23年目の告白」(Nスペ、8・13放送)は自衛隊が初めてPKOに参加したとき、文民として参加した警察官が死亡した事件の告白。南コソゴへの駆けつけ警護のキケン予告なのだが

……

D 「武器ではなく命の水を」医師・中村哲とテフガニスタン」(E TV特集、9・10放送)は病院を1000作るより1本の川を作った方がいい、と言った水路を作った。「きちんと農業が行われている所に過激派は発生しない」と言い、筑後川の蛇籠の技術を導入し、川を堰き止めて水を引き水路を開く。そして豊かな畑ができる。

A 医師の中村はシャベルカーを運転して大きな石を運び、地元民があとで修復できるように形を作り、地元民は熱心に働いて、凄い人がいるものだなあ、と思った。

B 川を堰き止める工事から青々と豊かな畑ができるまで時間をかけた取材で素晴らしいドキュメンタリーだった。

C 「ロッキード事件」(Nスペ、7・23、24放送)を2日連続でやったが、あれはスクープで、当時は全然浮かんでこなかった人物が続々登場する。徹底的に報道されたと思える事件が掘り起こすと新しい凄惨なことが出てくるのは実に面白い。

D 20億以上の金が動いた児玉ルートは結局解明されず、検察も触れられない日米間に横たわる巨大な闇があったのだろうと匂わせて終わっている。「眠れる東京地検特捜部」という番組はなぜできないのか。

A 児玉著士夫には触れないという話は塩漬けになっていた情報だ。こうした過去の検証について日本は非常に遅れている。それがやっと出てきたのだからこれを大事にしないと現在の問題にも立ち向かえない。

B 「巨額中国」はNスペのシリーズだが、最近ではネット通販、ネット投資を扱っていた。突っ

込みが足りないなどの批判はあるかもしれないがこれを意識していないとこれからの中国、これからの世界が分らなくなるという気がした。

C 「巨額中国」はその他に今年度「大気汚染」「移動1億人流動する農民工」「成長産業に金を流せ」などを放送している。

D 協力CCTVの作品もあり、中国をストリートに批判するものではない。

A 「決断なき原爆投下」米大統領71年目の真実」(Nスペ、8・6放送)はNHK広島制作。NHK広島は毎年、アメリカ公文書館に行つて手間暇かけて、文書、手紙、個人の日記、録音テープなどを発掘して知られていない真実を発見してきた。それはロッキード事件の検証にも反映している。過去の事件をこまめにチームを組んで追いかけるメディアは新聞社を含めてない。これからロシアでもシベリア抑留を含めて過去のことがいろいろわかってくる。NHKがこうした過去を掘り出すノウハウを継承していることはいいことだ。

B 原爆投下のこの番組については「原爆投下」知られざる作戦を追う」という続編が1月27日に放送されている。原爆の悪魔性を知らなかったというトルーマンの立場、始めたものを止められるはずがないと言うグローブス、京都爆撃の計画などが描かれている。

C 「ハートネットテレビ」はEテレで弱者や障碍者の問題を扱っている番組だが、ここで「相模原殺傷事件」を12月6、7日の2日にわたってやった。その後もずっと続けている。相模原殺傷事件は根の深い問題だがこの番組枠はきちんと追及している。

D 「ハートネットテレビ」は熊本地震のとき、

ふつうは2、3日たつて行くのだが、地震が起こった当日この番組のスタッフが現地に入って、

地震の現場で障害をもった人がどのように扱われるかを伝えた。何故そんなことをしたかというとき、3・11のとき、障害者は健常者の倍くらい死んでいる。その経験をもとに災害は障害者に重くのしかかるという観点で取材した。この番組は専門家をスタッフに持っていることでそうした動きができる。「バリ・バラ」もそうだ。

A 「ハートネットテレビ」は企画賞に評価していると思う。

B 昨年ドイツのホロコーストを取り上げたのがこの番組だ。文化福祉番組部の同じグループがやっている。このスタッフが相模原事件を追ったことを朝日新聞が特集した。

C この番組ではSEALSの奥田愛基がさんざんいじめられて南の島に逃げた体験を語ったものもある。「相模原事件から6か月」というのも最近やっていた。それから「暮らしと憲法」というタイトルで嫡出子でない子どもなどの法的な地位の問題、在日外国人の子どもの学業にサポートするところがないという問題など、大きい問題につながるのだが他のメディアの取材から抜け落ちている問題を丹念に拾っている。

D あの番組で教わったが、日本の憲法は外国人のことを一言も書いていない。外国の憲法では外国人の地位をはっきり書いたものが多い。憲法に書いてないと生活保護を受けることができない。在日外国人についてのあの指摘は流石だなと思った。

A 暮の21日、「バリ・バラ」では「こがずれる健常者」をやった。障害者100人が「こがずれる」と思うエピソードを持ち寄って

発表し、新聞記事にもなった。

B 「100分で名著」は今年度もいい作品があり、手塚治虫を長いスパンでとらえたもの、最近では中原中也が面白かった。今年はETVの番組にいいものが多い。

C BBSの「寺島実郎の未来先見塾」(報道ライブInsideOUT)で金曜日放送を推したい。彼はアメリカ経済をみると必ずヨーロッパを考え、アジアを考え、今のアメリカは賞味期限になっている、と言っている。第1次世界大戦の間にアメリカは世界一の大金持ちになったと解説する。「金融恐慌のときアメリカは保護主義になり、日本は生糸などの輸出が出来なくなり、満州国をつくり侵略戦争へと進むきっかけになった。戦後国際連合を作り、IMFを作ったアメリカが再び保護主義になるのはアメリカ政府の終焉を予感する」といった解説をいろんな専門家のゲストを招いてその都度解説する。

D 「経済的ストレスが大眾をおかしくし、ポピュリズムに走らせる。ここ100年の歴史でそれは明らかだ」、「アメリカの独立、建国にたして移民を拒否するのはアメリカそのものを否定することだ」と極めてわかりやすい。

A TBSの「サンデーモーニング」も寺島が出てくると面白い。「サンデーモーニング」での寺島の出演は5分程度と短い。「未来先見塾」はたっぷり長く、ゲストがあっても寺島がほとんど喋りまくって、これが面白い。

B BS11はピックカメラの経営で毎日新聞が協力している局だ。

C チューリップテレビが富山市議会の高額報酬を追及している。

D あれは北日本新聞の女性記者が市議会議長

に侮蔑的発言を受け、「ようし、それなら」と新聞社全体で立ち上がったそう。

A トクダネをとったのはチューリップテレビが多い。チューリップテレビはテレ朝、TBSの相乗り局なのでニュースステーションかニュース23でみたが、北日本新聞と抜きつ抜かれつかないな?

B TBSの報道特集でこの富山の特集をまるまるやった。

C 夏の終戦特集は会報の夏の座談会をみていた。ただ、番組名だけあげておこう。「映像の世紀プレミアム 戦争・科学者たちの罪と勇氣」(NHKBBS、8・6放送)。「加藤周一と青春と戦争」(ETV特集、8・6放送)。「緑十字決死の飛行」誰も知らない、空白の7日間」(ANB、8・14放送)。「村人は満州に送られた」国策 71年目の真実」(Nスベ、8・14放送)。

D 「加藤周一」は新聞(朝日)学芸欄の良心と言われた加藤周一の知られざる医師としての活躍に触れていた。

A 「村人は満州に」のテーマは昨年放送人グランプリ優秀賞を受賞した信越放送の手塚孝典氏が追いかけていたが村長の自殺までは追っていないかった。

B 「緑十字」は「ザ・スクープ」のスペシャルだが、「ザ・スクープ」は鳥越俊太郎と原一郎のコンビで高い質を保っていた。リタイヤと聞いているが原さんの名前を記憶しておきたい。

C 「関東大震災と朝鮮人」悲劇はなぜ起きたか」(ETV、9・3放送)は千田是也の話も出てくるが丁寧な作られていた。

D ドキュメンタリー関連で思うのだが昨年N

HKは何故年末回顧の「ニュースハイライト」をやらなかったのだろう。この番組はテレビが始まっていろいろ長年放送してきた歴史的な遺産だ。

A 「スポーツハイライト」を含めNHK恒例の年末回顧を紅白の宣伝番組ワクにしてしまった。B かつてはチームを作って凄く時間をかけ、力をいれて作ったが、ここ数年軽くなって時間が短くなっていった。いろんな番組に分散して「ニュースハイライト」はなくなった。

C いまのメディア状況では必要がなくなった、誰もが見てくれなくなったという判断ではないか。不可解だ。

D 吉永春子さんの遺作集を7本やったのが面白かった。「731部隊」は有名だが、他に硬軟とりまぜて「キャバレー・ハワイの特訓」などいろんな作品がある。

A 鍛冶橋クラブで一番光っていた存在で、ラジオの録音構成で硬軟なんでもこなした。全学連の闘士が右翼から金をもらったことを暴く。

B ダグラス・グラマン問題、自民党の40日抗争、大平対福田などもやっていた、実に面白い。まだフィルムの時代で、音声の同時録音はなく、カメラをどンドン回すことはできなかった。

【ドラマ】

B 昨日、2月2日に近藤晋さんが亡くなった。最後の作品が昨年11月、堀川さんの演出、山田太一さん脚本の「5年目のひとり」(テレ朝、11・19放送)。昨年2016年はどんな年かというところと東日本大震災から5年目で、「5年目のひとり」はこの年の記念碑的な作品だ。私は昨年2月、日本記者クラブの被災地取材団の一員として被害の激しかった陸前高田市を訪ねて、鳥羽市長に

会見したが、最後に市長は「遠いところを来ていただいて大変ありがたい。来年も来ていただきたいと思いますか？次は10年目ですか？」と問いかけた。これには誰も答えられなかった。でも、5年目は確かに節目の年だ。テレビは5年目をどうとらえたのだろうか？5年目の3・11のあと熊本地震が起こっている。

C 震災5年目については、昨年3月でグランプリの対象外だが、Nスペでいくつかの番組があった。民放でもドキュメンタリー枠でいくつかがやっていった。しかし現地はまだ完全に復興したわけではない。メディアは健忘症だと言われるが、この扱いの少なさはいかがなものかと思う。

C 会報の終戦特集で触れたが「百合子さんの絵本」陸軍武官小野寺夫妻の戦争（NHK・7・30放送）が秀逸だと思ふ。終戦特集番組が提示するすべての問題を吸収して一つの作品にしたような深さと幅があった。薬師丸ひろ子と香川照之。薬師丸が良かった。

D 漱石没後100年で「坊ちゃん」はじめいろんな作品があったが、中では「夏目漱石の妻」（NHK、土曜ドラマ、9月放送、4回）が抜群だ。池端俊作の脚本が冴えた。尾野真千子と長谷川博己。

A 「百合子さんの絵本」も脚本は池端俊作で、昨年度の「足尾から来た女」も彼の脚本だ。

B 池端の明治、大正、昭和の歴史考証が分厚い。しかも「足尾から来た女」のように歴史の後ろに現在が見える。彼は今日の視点を決して手放さないし、「百合子さんの絵本」でも戦争中勇ましいことを言っていた連中が戦後どう生きたかを描いている。

C 今のテレビドラマ制作のスタッフの中で池端俊作の存在は非常に大きい。彼を表彰することで、こんなことを書ける脚本家は大事なのだというメッセージを発したい。

D 今まで脚本家に賞をあげたことはないが、あげてもいいのではないか。

A 「漱石の妻」の演出は柴田岳志。この演出もいい。

B 夏目鏡子悪妻論があつて鏡子さんに同情していたが、尾野真千子が好演でよかった。あれが実態だろう。

C 池端氏は自分の姿を脚本の中に重ねる一方で、仕事と家庭と池端「そんな偉そうな亭主じゃないのだ」というものを感じた。

D 脚本家は素材に自分の姿を重ねられる企画になかなか出会えない。こういう機会にそれをやっていることはわかった。そんな作家の力量を引き寄せるような素材だったと言えよう。

A 座談会の冒頭に話が出た「5年目のひとり」は堀川とんこう氏の長い仕事の流れの中の作品の一つかもしれないが顕彰したい作品だ。

B この企画はテレ朝が山田太一さんを口説いたのでなく、近藤晋さんが口説いた。「時は立ち止まらない」の背景にいた群像を書きませんかとテレ朝が打診すると「書きません」と山田さんははつきり断った。そのあと近藤さんが個人的に話をしてきた。

C 渡辺謙さんをあんな風に撮るのはなかなか難しい。どうするかすると鼻息苦しく、きびしくなるのだが、ちよつとヒキのサイズで撮る絶妙のサイズ感が話とマッチしてて素晴らしい。

D 「真田丸」は三谷幸喜の脚本がよく、大河ドラマの新生面を開いた。「トト姉ちゃん」もいい。

A 花森安治の再評価ブームが若い層の生活感覚に根付くかどうか。

B 「トットてれび」（NHK 土曜ドラマ）では昔よく見た番組が次々と出てきた。昔の記憶があれば楽しくみられるドラマだった。

C 満島ひかりがよかった。彼女は「カルテット」（TBS、火曜、1月放送）でもいい。

C 「ゆとりですがなにか」（日テレ、日曜、4月放送）は宮藤官九郎の脚本で、ゆとり教育を受けたゆとり世代の物語。NHKでは難しいクドカンワールドが出来ていた。

D 日テレ日曜のこの枠では「そして誰もいなくなった」視覚探偵「日暮旅人」が放送された。

A 「逃げるは恥だが役に立つ」（TBS、火曜、10月放送）は話題になった。海野つなみ原作のコミックによるラブコメディ。

B ドラマをしかめつ面で考えないでやろうよという姿勢で、軽い文体。これがニューウェーブかなと思つてみた。これと「重版出来」（TBS 火曜、4月放送）が軽い。TBSのドラマは伝統的に重苦しいがこんなに軽くやれる人たちがあらわれたのかという感慨がある。この文体でドラマの新しい地平が開けることがあるかもしれない。

C 「カルテット」にも新しい文体を感じる。見やすい。

D 黒木華はオーソドックスなドラマだった。「天皇の料理番」に出て、古風な柄の女優と思つたが、「重版出来」ではちよつと違った。「軽い」と「軽やか」は違うと思つたが、「重版出来」から「逃げ恥」の路線は「軽やか」だ。原作はコミックでいまやコミックの取材はたいしたものだ。脚本はともに野木亜紀子。軽やかだが浅くはない。

いい。TBSドラマの新しい流れを感じる。単純に若い人に人気というだけのドラマじゃない。

A アメリカ大使まで踊っている。

B 「ドクターX〜外科医・大門未知子〜」（テレビ朝、木曜、10月放送）。あれはうまくできた活劇だ。分かつていても最後まで見てしまう。医療技術についてはアドバイザーがいるが、非常に深いものがある。

C 水戸黄門と同じで毎回決まった決め台詞があり、シーンがある。さすが定番のテレ朝だ。シリーズが新しくなるたび少しづつキャストイングを変え、10月からの第4シリーズでは草刈民代、泉ピン子、吉田鋼太郎を入れて失速しないようにしている。

D いま放送中のキムタクの「ALIFE〜愛しき人〜」（TBS、日曜）がそっくりだ。

A 「逃げ恥」はもう十分に褒められた。ドラマアワードで主演女優賞新垣結衣、助演女優賞星野源、助演女優賞石田ゆり子、新人賞大谷亮平、脚本賞野木亜紀子の受賞だ。

B 北川景子の「家売るオンナ」（日テレ、水曜、7月放送）は不動産屋、同じ枠で10月から「地味にスゴイ！校閲ガール 河野悦子」は石原さとみという、人気女優主演のお仕事系ドラマだ。

C 「重版出来」に「地味に凄く校閲ガール」と「家売るオンナ」が不動産屋。ドラマの舞台としては地味すぎてあまり取り扱わない世界に挑んでいる姿勢を買いたい。

D 「家売るオンナ」の北川景子。ラブドラマ専門の彼女が楷書体の演技をこなしていた。

A この2本は同じJPで最近バラエティー班から来て手がけた。

B 出版社を扱うドラマは大概編集部内の軋轢

を描くものだが、ここでは校閲部という地味な職場から見た疑問を追究し、雑誌作りの本質に迫っている。

C 「家売るオンナ」と「コントロール」罪と恋
S (NHK、金曜、4月放送)が大石静のオリジナルの脚本だ。「コントロール」は「セカンドバージン」のような大人のどろどろした許されない恋を描いているが、トラック運転手のジャン・ギャバンとフランソワーズ・アルヌールの悲恋を描いた「ヘッド・ライト」のテイストがあった。「家売るオンナ」は打って変わってコメディだ。

D マンガ原作ばかりの中で大石静は60歳過ぎてオリジナルで頑張っている。大石静らしい毒がこめられていて、時代、やわな風潮に相当毒づいている。大石静はNHKでも民放のエンタメ枠でも戦っていて、声援を送りたい。

A 「精霊の守り人」(NHK、土曜、1月放送)は綾瀬はるか主演のアクションドラマ。無国籍で登場人物の名前が覚えにくい。綾瀬はるかバルサだとやっと思えた。

C 原作は上橋菜穂子の小説で、300万部売れた。

D 「ハリーポッター」やVFXなどの特殊撮影映像に慣れた子どもたちに感想を聞くと「映画に較べればチャッチイ」と言う。

A が、大人には大河ドラマの直虎より面白い。
B 世界に売れるドラマを作ろうと制作が始まったドラマだ。凄くお金がかかっている。その意味では日本の視聴者向けには感覚が少しずれているかもしれない。

B 「東京裁判」(Nスベ、12・12・15、4回放送)はドラマだね?東京裁判の担当判事たち

の苦勞話。判事たちは誠実に議論し、「平和に対する罪」については無罪だと判断した。裁判自体の是非は別だが、4か国の共同制作で素晴らしい役者を集め、重厚に作っている。

C 東条英機など被告の映像は実写が使われている。実写の映像をカラーにしてドラマの中にも組み入れてある。

D 30年ほど前、日本の戦後シリーズでドラマをやった。玉井功P、大原誠演出で、東条英機は小沢栄太郎。これと比べると今回のドラマは訴えてくるものは少ない。

A かつて木下順二が書いた舞台を見たが、あそこでもっとはつきりした歴史観があった。

B 最近一部に東京裁判がおかしい、不公平な一方的な裁判だという論調がでてきており、東京裁判全体をクールに見直すタイミングでもあったのに、あまり話題にならなかったのは不思議だ。

D 「鬼平犯科帳 THE FINAL」(フジ、12・2・3)。これは最終回だが「鬼平犯科帳」は1989年から始まった。89年はフジテレビのトレンドイードラマ全盛期で、バラエティも盛んだった。その中で生まれている。Pは一貫して能村鷹一。大岡越前など勲善懲悪の東映時代劇とは違う池波正太郎の世界を作り出した。能村さんはこの後渡辺謙の「御家人斬九郎」、役所広司の「盤獄の一生」を作る。スカパーの時代劇専門チャンネルでは「鬼平」と「剣客商売」がテープが擦り切れるほど再放送を重ねている。それほどの時代劇を作った功績をこの機会に評価したい。

A 単発ドラマではWOWOWの「沈まぬ太陽」他、読売テレビの「愛をこめて」、毎日テレビの

「しあわせの記憶」フジの「三屋清左衛門」などもある。

B NHKBSでやっている地域発ドラマ。12年から始まってもう30数本になり、先日は東京の八王子、最近では都内23区に移って足立区千住発のものやっていたが、それぞれの支局がそうがかりで作っていて地方色豊かでそれぞれなかなかの出来だ。

C 民放の地方局同士がヨコの連帯を意識する動きが出てくるが、NHKが全国の支局組織を動員するこのシリーズは企画としても注目だ。

【ラジオ】

A 永六輔、追いかけるように大橋巨泉が亡くなったのが今年度のラジオの話題だが、注目した番組を二つあげておきたい。

一つは「あの日は少女だった」被爆の記憶をたどる母と息子の対話」(NHK、8・6放送)。ラジオドラマでもあり、ドキュメンタリーでもある作品で、ドラマの部分の母と子を樹木希林と義理の息子の本木雅弘が演じ、それぞれにドキュメンタリーの部分の朗読もしている。原爆のとき母は女学生だった。建物疎開の作業に従事していた8千人のうち6千人が亡くなったおり、その中で生き残った女学生の一人がその母だ。非常にいい出来で、文化庁芸術祭で大賞を受賞している。

もう一つは、ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞したのを機に東京FMが作った番組。小室等とロバート・キャンベルの対談だ。

(会報本号のラジオのページ参照)

B アーサー・ビナードの「探しています」(文化放送、土曜午前5時放送)は1年間、戦争体験を聞いてまわった番組だ。彼は詩人、随筆家、

絵本作家といろんな顔があるが、この番組は「これぞラジオだ」と思わせた。

C NHK名古屋で作ったFMシアターの「あいちんは幻」(10・1放送)「ほかの誰でもないアヤコ」に注目した。アヤコはイモトアヤコの主演。最近東京から転動した笠浦友愛の作品。FMシアターの中では異色作。

D 深夜便を聞いているが、各局のアナウンサーが鉄道の各駅を辿ってルポをする。昨日は屋島を通過して壇ノ浦へ行く鉄道だった。深夜で駅員はいなくて乗務員が改札を務める。全部生中継ではないようだが、空気がすばらしい。いかにも深夜ラジオらしい企画。

【バラエティ】

A 今更と違和感があるかもしれないが「はじめてのおつかい」(日テレ、スペシャルを1・9に放送)を推したい。20数年やっているがみるたびに愛に感動する。とんでもない労作だ。この20数年間にカメラは小型になり、スタッフは経験を積み重ね、記録を積み重ねて子どもと親たちのその後の人生も語るようになった。

B テレビの原点といえる番組だ。テレ東の「YOUは何しに日本へ?」も同じで、企画の勝利だ。人気があつた。東南アジアでは日本のバラエティに人気がある。

D 「人生フルーツ」はいろんな賞を受賞しているが、ドキュメンタリーでなくエンターテインメントのとしての受賞がある。

A あのお父さん、建築家の津端修一さんは冷静にみるといい気なものだ。奥さんは我慢していたのだ。

B 妻のことを「人生最高のガールフレンド」と

言っているが、いい気なものだともいえるし、変わり者だ。奥さんは素晴らしい。

C 老境の夫婦はドキュメンタリーの一つの山でこれまでもいくつもの秀作がある。

D 死に顔を延々と映しているがPの阿武野勝彦氏の指示だそう。

A 庭に立木があつて一本ずつに札がついていて名前と年月日を書いてある。それは知人の命日だ。冠婚葬祭に絶対出席しなかつた人で、知人が死ぬと札をかけたそう。

B 民放連の放送文化大賞を受賞して1000万円を貰った。この賞は奨励賞でこのお金で作品を作りなさいというもの。

C 「人生フルーツ」というタイトルがいい。スタッフでいくつものタイトルを考えてやつと決めたそう。

D 阿武野一家は骨太い映像の商売人だなあ。

A 「やくざと憲法」「裁判長のお弁当」などこれまでタイトルはうまい。

A では、こんなところで。

座談会次第

日時 2月3日(金) 午後2時〜5時
場所 千代田放送会館 3階会議室
出席者 石橋冠、伊藤雅浩、隈部紀生、河野尚行、鈴木典之、西村与志木、藤久ミネ、堀川とんこう、松尾羊一、三原治

第60回放送人句会

◇平成28年12月14日(水) ◇赤坂・表屋

◇選者：星野高士

◇出席：伊藤視郎、荻野慶人、佐々木光野、鶴橋康夫、中島大博、新村もとを、西川阿舟、林備後、深尾一化、堀川とんこう、森治美(十二名) ◇不在投句：山県ほん太

◇兼題：ねんね、鮫鱈、湯さめ、千秋楽(業界用語)

【星野高士特選】

積より夜気を負ひ来る湯さめかな もとを
鮫鱈の鍋ぬらぬらと酔ひ心地 丈博
石蹴りやねんねこの梅揺れぬたり とんこう

温泉に仲良く妻も湯さめせり 光野
終ひ湯に湯さめのからだ沈めけり ほん太
湯さめして失き橋まで歩きけり とんこう

鮫鱈も口閉ぢてをり路次静か とんこう
湯冷めして蝶の交尾が疎ましく 康夫
ねんねこや天鵞絨の夢千守唄 丈博

雪もよみ楽日の客の急ぎ足 とんこう

【星野高士選】

鮫鱈を食わず嫌いはお気の毒 慶人
鮫鱈が旨い足りぬと安忍怒鳴る 視郎
煙草吸ふひまも危ふき湯冷めかな 丈博
長電話終へて身を振る湯さめかな 一化
湯さめして日記書く背やひとり酒 とんこう

言ひ訳を散々と聞き湯さめかな もとを
ラブホテル

出で湯さめして帰りみち 視郎

打上の熱燗恋ふる楽日かな

千秋楽南座あたり雪催

グルメバス一路鮫鱈日和かな

鮫鱈のどの面下げて切られをる

ねんねこの裾につかまる幼幼な

ねんねこや裸電球揺るる夜

湯さめせぬやうにと思ひのぼせけり

ねんねこの母子は同じ顔をして

鮫鱈の呑み込みたるか我が悪夢

千秋楽忠臣蔵は外も雪

ねんねこの好く似合ふ浅草の猫

うたた寝の背に憑く湯冷め老い漸々

みな揃ひ鮫鱈なべや夜も更けむ

繕り戻しねんねこ代りと言つてみる

露深き天心の海鮫鱈鍋

ねんねこにイクメンの顔ほころびぬ

楽屋沸く千秋楽に餅とどき

火遊びの千秋楽に枯野かな

患ひの話しありつつ鮫鱈鍋

鮫鱈の口開け注ぐ柄杓水

事納め田舎居も千秋楽

夜爪切妙に手間取り湯冷めせり

早や湯さめ老舗の宿の長廊下

ねんねこをおろして子守りする休み

湯さめして月を待ちたり箱根山

八つ口のあたりを迷ふ湯さめかな

ゆく年や悲劇喜劇が千秋楽

ねんねこの紐引いて来る孫憎し

一化

備後

ほん太

一化

とんこう

備後

阿舟

阿舟

丈博

視郎

もとを

丈博

光野

康夫

もとを

治美

光野

康夫

備後

もとを

慶人

もとを

一化

視郎

とんこう

備後

慶人

一化

【全員互選】

鮫鱈は肝を冷やして喰はれけり 一化
早よ寝ろや寝んと湯さめの鬼さ来る 備後
わが妻の縄文顔や鮫鱈鍋 康夫

けはひ

化粧する妻見てし間の湯冷めかな

深海を出て鮫鱈は陽呑み

ねんねこを背広に重ね青年団

待ち人を怨む夜明けの湯さめかな

湯さめした冷たき肌情あふる

杯交はすこもこも湯さめ至りつつ

へうへうと終ひ神楽の笛ならむ

ねんねこの中に小さき手の見ゆる

愛想よき女将鮫鱈吊し切り

ねんねこで振り向く嫁のほつれ髪

ねんねこや稚児のまじろみ縷子の襟

ねんねこの淡き乳の香愛しき子

ねんねこにあのねあのねの声がした

幕間に千秋楽の寒さかな

湯さめして表紙の重き漫画本

ねんねこや遠く聞こゆる鐘いくつ

庭石の鈍き光や湯さめして

鮫鱈や嘘は美字といふ人も

あまりにも星を見過ぎてある湯さめ

語るとき鮫鱈鍋の端つつく

丈博

視郎

もとを

慶人

治美

ほん太

視郎

視郎

一化

丈博

光野

光野

康夫

星野 高士

次回放送人句会 平成29年2月15日(水)
18時頃から、投句締切19時○赤坂 表屋(投句 03-3538-0556)○兼題：春時雨、猫の恋、春菊、長台詞(業界用語)
(この2月句会の記録は6月発行予定 次号の会報に掲載します)

ラジオのページ

ラジオプロジェクトメンバーの皆様へ 「ラジオ聞き酒の会」のご案内

お元気でお過ごしのことと思います。この度ラジオプロジェクトのメンバー数人から『話題になっているラジオ番組を聴いて語る会を開いたらどうか?』との提案があり、早速第一回を左記の要領で開催することになりました。ラジオを愛する皆様と話題のラジオ番組を聞き、うまい酒を飲みながら「聞き酒会」のように良否を鑑定すると同時に、メンバー同士の交流を深めたいと思います。奮って参加下さい。

出欠のご連絡は清水のメールアドレスにお送りくださいませ。

(E-Mail) : shimiz@nack5-pro.co.jp

「ラジオ聞き酒の会」

日時：3月9日(木曜日) 17時より21時

まで(予定)

場所：Bar「DUKE」六本木(03-3401-7565)

東京都港区六本木3-10-4

六本木パークビル2階

六本木交差点近くの瀬里泰本店の向かいのビル。博多焼き肉「龍」の看板が目印です。地図は

<https://www.hotpepper.jp/str.J000932888/>
会費：4,000円(ワイスキー飲み放題
簡単なつまみ)

メモ：今回会場に選んだBar「DUKE」は浮田様の紹介で、六本木交差点の近くにあり、アクセスも良く、20人くらいで満席なるような小さなお店です。常連客が持ち寄ったラジオの名番組がライブライリーとして並び、落ち着いた雰囲気番組を聴くこと

が出来ると思います。

「試験番組の概要」

番組その1(凡そ50分番組)

第71回文化庁芸術祭賞ラジオドキュメンタリー部門大賞受賞作品 広島原爆の日ラジオ特集「あの日、母は少女だった」被爆の記憶をたどる母と息子の対話」

NHKラジオ第1、2016年8月6日(土)午後9:05~9:55放送

【内容】次項(三原治氏の…)参照

【朗読】樹木希林、本木雅弘、渡邊弘子、田原彰敏、【語り】中山果奈【脚本】高橋知伽

江
http://www.tdk.or.jp/awards/award/prog/ram.html?i=20161227_01

番組その2(凡そ15分番組)

「GOGOワイド」(GOGO)

月々金曜日14:00~18:20

SBSラジオ(静岡放送)放送の生ワイド

番組から一部抜粋

放送日：2016年5月25日(水)

【出演】杉原 徹十長谷川 玲子(水と木を担当)

【内容】昨年5月26日、伊勢志摩サミットが開催されたが、その前日に放送された番組オバマ大統領に広島訪問を進言したプロテストソングの女王ジョーン・バエズ。若きオバマは、彼女の歌に共鳴し、政治の道を選んだ。一方、静岡県在住の金子詔一が作詞作曲した「今日の日はさようなら」。森山良子が歌い1996年にヒットしたが、ジョーン・バエズはこの曲を日本語で歌っていた。その歌声とオバマのスピーチが番組で重なった。生ワイドの中の短いコーナーであるが、地元

の人物が作った歌が日米をつなぐ壮大なドラマに発展していくことを教えてくれた名番組。

ラジオの魅力伝えてくれる作品

三原 治

昨年度の戦後70年、東日本大震災から5年の節目というテーマを取り上げた秀逸なラジオの作品は数多く発表されています。その中でも、心に深く残った作品が「広島原爆の日」ラジオ特集「あの日、母は少女だった」被爆の記憶をたどる母と息子の対話」。

2016年8月6日放送です。
ドキュメンタリーとラジオドラマ(朗読)を見事に融合させた、完成度の高い力作です。広島で被爆した母と、その母の体験を聞きとる息子。二人の対話を肉声と朗読で巧みに織り上げていきます。朗読者に樹木希林さんと本木雅弘さんという義理の親子を起用しており、二人の表現力の高さも作品に重厚感を与えています。

戦後、平和の象徴として建設された広島市の平和大通り。昭和20年8月6日、この道を作るために働いていた中学生6千人が、原爆の犠牲になった惨事は、これまでもあまり知られていませんでした。NHK広島放送局では、当時、空襲による延焼を防ぐためとの理由で建物を解体・撤去し防火帯(空道)を建設する「建物疎開」作業に注目し、取材を続けてきました。この作業に主に従事していたのが、当時の中学一、二年生たちで、8千人中6千人が死亡。かろうじて生き残った中学生たちも、その後多くが原爆症や高齢により亡くな

っていて、ようやく辿りついた当事者も、80歳代半ばにさしかかり、体験を聞けるぎりぎりのタイミングになっていました。

その中で出会ったのが、今回の作品の主人公である渡邊弘子さん(84)とその息子、彰敏さん(61)でした。弘子さんは、被爆の記憶を鮮明に残しており、建物疎開についてもかなりしっかりと覚えていました。さらに、彰敏さんが、母の体験を継承しようと熱心に取り組んでもいたのです。

弘子さんは、いつも腕を組んでいました。その左肘は被爆した時から「くの字」に曲がって動きませんでした。それを隠すために染みつけた瘻だったのです。その姿に息子の彰敏さんは慣れてしまっていました。被爆体験を自分から聞くことはなかったし、母も語ることはありませんでした。

ところが被爆から70年の一昨年、被爆体験を高校生に話す証言の依頼が舞い込んだことで、弘子さんは体験を話し始めました。制作者の企画意図には、「壮絶な体験をしながら気丈に生きてきた弘子さんも、これまで誰にも話せなかった心の傷を深く負っていた。二人の姿を追うことで、ある被害者が心に長く秘めてきた悲しみと、体験した者にしか分からない被爆の惨状を描くことができ、建物疎開についてもその事業の一端に触れ、多くの人に知ってもらおうきっかけになる」と考え番組を制作した」とあります。

この作品ならではの特徴は、母と息子の対話を通じて被爆体験を受け継いでいく姿を、本人たちの声と実力のある俳優による朗読で伝えている点です。

被爆から71年が経ち、当時の記憶を語れ

る人が少なくなっていく中、逆に70年を過ぎた今だからこそ語ることでできるあの日の記憶もあります。今回の作品は、まさにそうした被爆者が語ってこなかった事実を伝える作品でもあるのです。

70年の時を経て、母が息子に被爆体験を語り始める瞬間。本人の声と俳優の朗読がうまく組み合わされ、母の記憶がリアリティを持って迫ってきます。戦争が人々に与える肉体的、精神的苦痛の途方もない大きさを感じさせてくれます。最後の本木さんの独白に「母は84。私も今年で61。残された時間は多くはありません。一人でも多くの人に、あの日、一人の少女が経験した、今も続く悲しみを知ってほしい。そう願って、これからも母との対話を続けます」とあります。この普遍的なテーマに私たちはどう向き合うのか、重く受け止めなければなりません。

話は変わって、こちらもぜひお伝えしたい作品があります。TOKYO FMの作品2本。10月23日放送の『ボブ・ディランノーベル文学賞受賞記念「The Times They Are a-Changin'」時代は変わる』と11月23日放送の『ミュージックドキュメント 井上陽水×ロバート・キャンベル「言の葉の海に漕ぎ出して」』

ボブ・ディランに関しては、前回のラジオのページで延江浩さんがふれていましたので、省略します。もう一本が、井上陽水の歌の魅力である、どこどなくとらえどろのない歌詞に、「ロバート・キャンベルが英訳という手法で切り込む面白さが特徴の番組です。日本文学を研究するキャンベルは20代の頃から陽水の歌を聴いていたということ、そのなか

で出てきた疑問をぶつけていくのですが、たじたじとなる陽水がタイムを要求する場面などもあり、陽水の今までに見たこともないような場面にも出会える貴重な時間でした。*****

流浪僧のラジオ人生

「私の人生は、どうしてこうも、周りの人達の縁によって生かされているのか」と私は思っています。

「私と放送との係わり」ということですが48年位になります。学生の時二足のワラジで大映映画のニューフェイスを受け大部屋俳優をしていました。

俳優としての思い出は映画出演ではなく、大部屋で一人の時に宇津井健さんが来て、私に声の出し方などを指導してくれたことですが、その他はコマーシャル出演が多かったということくらいです。

大映映画が倒産しそうだと先輩だった社員さんから教えられ、卒業前だったので、急いで会社を探して、設立時の日本道路交通情報センターに入りました。センターの設立が昭和45年1月1日で、その日から臨時職員です。1年ぐらい雑務をやってみるとFM東海がFM東京となり、交通情報番組を放送することとなったということで、担当アナウンサーをすることにしました。

その後は、名古屋センター、オリンピック前の札幌センター、仙台センターなどの開設でアナウンサーの募集、教育局との対応など東京から単身赴任で仕事をさせられていました。なにしろ職場は各警察本部交通管

制センターですからどの町でも安心して仕事をさせてもらいました。日本道路公団勤務の時には「ハイウエーラジオ」の研究・開発そしてその後の対応などで1620MHzをいただけとは信じられませんでした。

このハイウエーラジオを運営している時に今のJWAVEへの出向を命じられたのが39歳、私の第3の人生の始まりです。

仕事は、創業時で総務全般、開局1年後に企画・事業などの現場になり、朝日新聞から出向の方の部下としてニュースキャスターと新規事業ということでアスキーの方と「新都市創造計画」等をしていました。

その頃、編成の席から私に電話が入っていたので出て下さいということ、受話器をとると、京都の会社の方が「お話があるので来ていただけませんか」ということでした。内容は京都では計画以来8年かかったが、FM局の免許がとれそうなので手伝って下さいとのことでした。

その当時私は、新聞各社から出向している方々や民間会社からの出向の方々が転籍することも聞いており、悩んでもいたのですが、私の上司も本社に戻って行かれてしまいました。帰社する方、転籍する方、新しい人などで会社も急に大きな所帯になり、「このままで良いか」と考えはじめ、2年位なら京都へ行こうという思いでFM京都へ入社し創業のお手伝いをしました。

FM京都の仕事をさせていただいているとき、「東京組」と呼ばれておりましたが、年月が経つと京都の若い経営者の方たちと懇意になるやら、先斗町の日舞の先生が私の日舞の先生だったりと段々視野が開けてき

ました。

そして、お付き合いさせていただいた方々の多くが人生のある時に「得度」して、自分の判断の核のところで「利他・自利」つまり「世の中の役」に立っているか「人様のお手伝い」ができていないかの判断をお釈迦様相手に自問自答されているように思いました。

その後、FM京都から再びJWAVEに復帰し、音楽著作権管理の仕事やインターネットラジオ局の開設等の仕事を多くの人々の助けを借りながら遂行し、63歳まで働きました。

退任前の平成15年9月23日に、遅ればせながら、奈良県大和郡山額田郡寺町の額安寺という聖徳太子の御学問所であった寺で、唐招提寺八十二世長老の遠藤證園様に得度させていただき、釈迦範となりました。老人であり独身でもないので一生修行の坊主として歩くより道がなく、唐招提寺の僧は独身第一、「額安寺・流浪僧」として四国を歩き、いま沖繩を歩いています。得度した日は、父の命日の日でもありました。

そして、66歳のころ沖繩の東海岸にある古都、与那原町でデイベロツパーをしている会社から、コミュニティFM放送のことを教えてほしいという話があり、話を聞いてみると、この町は四年後に国土交通省観光庁の推進する大型MICEが誘致され、中城湾の四町村向けに一つの放送局を設立し、町おこしの象徴にしたいので、手伝ってほしいということになりました。

それから、町の方たちと話し合い、まず、町の歴史の再発見、遺跡復元やら、歴史のお祭りのストーリーを調査し、最近は大正時代

沖繩に軽便鉄道というのがあり、その駅舎を復元したので指定管理人になってほしいというところで、沖繩生活も4年目に入りました。その過程で、鎌倉時代に額安寺から出て、鎌倉の極楽寺を創建した忍性聖人の「鑑真和上・東征伝絵巻」にお会いしました。和上が六六歳の時、大和の国にわたる途中、琉球国（阿児奈波）に15日間ほど停泊していたことが書かれていたのに刺激され、そして、今も、その停泊港を探し求めています。

沖繩との関係について考えると、沖繩返還闘争というときに、大学の輔仁会雑誌の編集者と取材に行ったのが初めてでした。その後、運動部の先輩やゼミの先輩に沖繩の方がおり、今回も随分とお世話になっています。

この様に私は今も多くの人たちとの縁によって生かされてきたことを実感する日々を過ごしています。(J・WAVE OB) *****

想像創造のより豊かな楽しみを

斉明寺以玖子

19世紀半ばに生まれた通信事業が科学技術驚異的發展の20世紀を経て、マイクロ波による大陸間通信中継目的の人工衛星を打ち上げ赤道高度3万6千kmの円軌道に載せかつ地球上の1地点上空に静止させることに成功(同種通信衛星3個を配置すればマイクロ波回線で全世界を覆うことができる)、資本主義経済圏の基幹事業として文字通りの世界制覇を達成した昨今、「放送」事業も、遂に政府財界の方針に則り、先行技術開発成果を引つ提げ「通信」との融合へと舵をきりました。

しかしグローバルネットワークは本来軍産共同開発の賜物だから、あらゆるデータは事業者の手に握られ、且つ世界中で解読され得るわけ。CIAを辞めたE・スノーデン氏は横田基地内にある米国家安全保障局代表の契約職員として勤務、世界同時監視システムが当然日本にも及んだ次第を証言しました。米本国では抗議批判を浴びて制限法が出来たのに、「違法にならないように特定秘密保護法を作れ。そうすればより機密性の高い情報を提供できる」という有難めく強い示唆に唯々諾々、現政権は民間・個人まで含む膨大な量の情報盗みを隠匿する(窃聴)保護法を成立させ、実効採決には余りに評判が悪い為、オリンピック・テロ対策に必須として「共謀罪法」に名前を替へ一層徹底した国民監視システムを強行採決に持ち込もうとしています。トランプ土産の一つです。(東京新聞2月15日)

立憲民主主義及びジャーナリズムの危機と元軍国少年の私は切に憂えています。首相招待会食やゴルフに欣然トップ連が雁首揃える報道機関というのは、前の15年戦争時に相変わらず、いや、これだけ貴重な情報が種々公開されているのに、株主?への義理立てと保身優先で歴史に学ばず、圧倒的多数の市民未満人を絶滅の道へと追い立てる非常合理主義者リーダー達は、脳力に異常を来しているのではと案じられても来るのです。話す言葉によるコミュニケーションこそが、人類生存の鍵であることを蔑ろにしてはいけない、絶対に。顔見合わせて声に心の思いを籠めるのではなく、幼若中高年ひっくり返して瘦せた記号文字を限られたスペースに鎮

めこむ情報交換が、他人と繋がる唯一最高の手段だと信じ込まれるとは、親世代が子育てに際して余程汗流だつた所為でしょうか。ぬくぬく甘やかされて自分で考える習慣を身につけられなかったのだ、こんな答ではなかったと早く気づいてほしいものです。

ことばは生まれたとき親と子の間に始まる社会生活の最重要ツールです。風土・暮らしと密着して、地域ごと、里ごとに違っていてよいのです。格差解消を願う各地生活文化の多様性を尊重する国連の大方針で、UNESCOが、世界中の絶滅方言の記録保護に力を入れていて、日本にも該当語が少なくありません。方言札など以外の外、その地のたまたまに相応しい話(ことば)は出来るだけ守りたいと私は常々考えてきました。

日本語は情豊かです。発声者の気持ちや思想に活かされて声の表情が揺れ動き、表情や光景や隠れた背景までもが鮮やかに浮かび上がる。そう見えるのです。

顔は上げず耳も塞いで掌中の画面に没入する大勢さんの、自分に馴染みのない条件を端から拒絶する狭量さは、多分、相手の目を見る勇氣・話しかける心の弾み・ことばを聞き取る集中を失しむ術を知らない、自分らしさ欠乏症の顕われです。まず、ラジオを聞くことから始めては、如何?

今回与えられた課題は「オーディオドラマの現状と未来」ですが、この先はNHKドラマ番組制作現場で獅子奮迅活動中の真銅健嗣氏にお願いした簡潔な現状レポートを、話し合いの時間がないまま、転写させていただきます。

【2016年ラジオドラマ全般】

▼民放各局が「ラジコ」で10月から「タイムフリー」を導入。過去1週間以内放送の番組につきいつでもネットから聴取することが出来るサービス。ただし、再生ボタンを押してから3時間以内でないといけない。↓ラジオとインターネットの融合が大きく進んだ。

▼継続している番組 東京FM「ニッポン、阿部礼司」10年を経過する人気番組。ライブイベントなども好調。文化放送「青山2丁目劇場」。TBS「ラジオシアター」。NHKオーディオドラマ「FMシアター」。「青春アドベンチャー」。「新日曜名作座」など。

▼ほかのラジオドラマ的番組 NHKFM「AKB48 私たちの物語」(隔週金曜)。NHKRR1「劇シジ」 劇作家による公開生放送ライブ上演スタイル(演出も、不定期、年2度ほど)。NHKRR1でシェイクスピア作品など、著作権切れ作品をねらったものもちらほら。

▼2015年秋だが、NHKFMで「今日は1日ラジオドラマ三昧」を、(10時間以上放送。往年のアーカイブス作品など蔵出し放送。第2弾へのリクエスト希望も多い。*当企画に真銅演出作品「優しさ」"こ"参加。

▼2016年のオーディオドラマ「FMシアター」年間新作42本(うち特集オーディオドラマが2本)。再放送は5本。1月放送「あいちちゃん」が放送文化基金賞ラジオ部門優秀賞。「青春アドベンチャー」年間新作3本、アンコール再放送8本。「新日曜名作座」ほぼすべて新作。再放送、制作実数はかなり上がっています。

▼インターネットでのラジオ聴取について

ネットデータする時点で技術的に或る程度の圧縮をおこなっている。ただし万全のインターネット環境で音源再生できるなら、普通の人にとって聴感上電波でのラジオ聴取とほとんど聞き分けがつかないほどになっている、といわれている。ただしすべてはインターネット環境に左右されるので、今後ますますインターネットとラジオの融合が進むなか、リスナーにどういう音でつたえていくか課題は果てない。

いろはに時代劇 くその拾へ

菅野高至

「はやぶさ新八御用帳」の役者たち、トリは南町奉行、根岸肥前守鎮衛（おぎしひぜんのかみ やすもり）の山口崇さん。93年、山口さんは57歳だった。実在の肥前守は61歳で南町奉行になるが、鬼勘（六戸錠）とかぶらぬように、意識的に少し若くしてキャストイングをする。長唄三味線をたしなむ山口さんは、能吏だが世情によく通じる御奉行に最適だと考えた。だが、ヒロインお鯉・上司・部下の三角関係を描く目論見が消え、ラブストーリーラインが希薄になったため、肥前守と新八郎は単なる上司と部下になる。芸達者な山口さんには、面白みが無くなり、まさに辛抱役となってしまふ。

少しでも、史実からお奉行を描くヒントを探ろうと、実在の肥前守鎮衛が、佐渡奉行の時代から30年間書き継いできた随筆集「耳囊（みみぶくろ）」を読む。「耳にとど

まりて面白き事ども、または子弟の心得にもならんと思ふ事、書きとどめて一囊に入れ置きしに、塵積もりて山とはなりぬ」

勤務の合間に聞いた怪談奇談や世間話を書き留めたもので、全十巻千編に及ぶ。平凡社の東洋文庫から『耳囊』全一巻が出ている。

それを読んで分かったことは、江戸はまだ闇の世界で、江戸人は妖怪、物の怪を信じていたと言う、思えば当たり前の事実だった。以来、時代劇を作るたびに「江戸は闇だった」と、まずは呪文のように唱えることが倣いになる。

この鎮衛は百五十俵取りの下級旗本の三男坊に生まれるが、父親が根岸家の御家人株を買ひ、鎮衛を末期養子に迎えて家督を継がせ、勘定所の中級幕吏となる。5年後には評定所留役、今に置き換える最高裁の予審判事になる。その後は、勘定組頭から勘定吟味役になり、佐渡奉行を経て、50歳で勘定奉行に就任し、61歳で南町奉行・家禄千石となる異例の出世を遂げた人物である。松平定信の信任もあつく、18年間も奉行に在職し、幕末が近い一八一五年、76歳で亡くなる。

山口崇さんに初めてお会いしたのは、76年の大河ドラマ「風と雲と虹と」（原作：海音寺潮五郎、脚本：福田善之）だった。

僕はただの新米FDだが、彼の役は将門の幼なじみながら、後に将門を討つ平太郎貞盛で、少しく口数は多いが、いつも明るく場を和ませる手間のかからぬ役者であった。39歳、騎乗にも自信を持っていた。

「風と雲と虹と」は、スタジオでも毎週必ず馬の出番があったが、場慣れしている馬

は少ないため、主役の将門以外は馬具を飾り変えて4〜5頭の馬を使い回すことになる。馬具替えは、スタジオを出て大道具搬入口の駐車場で行う。人間と同じで、焦って急かせると機嫌が悪くなり、段取り悪く衣装替えが重なる、たちまち動きが鈍くなる。言うことを聞かず、粗相もする。

ロケでも巧みに乗りこなしていた山口さんだったが、ある日セットの坂道で、2頭並んで照明の手直しの待機中に、高さ1間近いところから馬が落ちてしまう。待ちくたびれた馬が気まぐれに、道ばたに置いた灌木の葉っぱを食べようと、動いて踏み外したらしい。幸い馬は無事だったが、山口さんは骨折して、しばらく撮影は出来なくなる。いつも嫌嫌良く騎乗している姿に、つつい甘えてしまったのだと、スタッフはいたく反省する。

落馬で言えば、合戦ロケでも、若駒や地元のエキストラが落馬する。ロケ地は茨城県結城郡石下町（今は町村合併で常総市になっている）。ロケ前日の騎乗試験に合格したエキストラと若駒の武将が合戦場を疾駆する。遠目にはなだらかだが、ゴルフ場開発が頓挫して敷になった丘陵地だから、思わぬところに大穴が開いていて、自信満々のエキストラの武将や若駒までも落馬してしまふ。で、僕は救急車に同乗して、何回か病院に向かうことになる。

馬は人を見る。ロケの初日、新米は馬にも馬鹿にされる。デスクで金庫番のKさん、財布の紐がとみに固く、馬方のボスへの支払いを値切ったため、繋留留所まで馬を引くギヤラは貰っていないとばかりに、

トラックから馬を降ろしたところで、その場にいたスタッフに手綱をあっさり渡す。かくして、待機場所までの細道を、新米も馬を引くことになる。及び腰の新米に、馬はわざとすり寄り、足を踏みつけてからかう。道の端に追いやられ、歩みにくそうにしている僕を、後ろから馬を引く演出のMさんが笑って励ましてくれる。

「風と雲と虹と」のあと、暫くは付き合いが無く、次なる出会いは90年の夏だった。NHK大阪で制作した「ちりめんじやこの詩」（91年1月放送、45分の全四回）というドラマである。原作は阿久悠。

脚本は高橋正岡。お話は、昭和22年の夏の淡路島、巡査の父の転勤で三度目の転校となった少年を主人公に、野球好き少年少女の冒険の日々を描く。巡査の父を山口さんに演じて貰う。山口さんの出身は鳴門海峡に面した淡路島の阿那賀（あなが）村。今は南あわじ市と言う。昭和22年の夏、彼は10歳だったから、風俗考証と方言指導の強い助っ人になった。

ところで、この放送の枠は、金曜夜8時「子どもパピリオン」と言うタイトルで、少年少女むけのドラマとドキュメンタリーを放送した。「子どもパピリオン」は90年度、一年間で消えた。前年度は「ジエシカおばさんの事件簿」、91年度は4月期の時代劇「赤頭巾快刀乱麻」（脚本：矢島正雄）。思いつきの編成で混乱するのは制作現場だけでなく、お客様もしかりで、呆れ果てて8時台から離れてしまふ……。

（つづく）

第42回名作の舞台裏

『ありがとう』（TBS系）

主催・放送人の会、放送番組センター
 日時・2016年12月3日15時〜17時半
 会場・横浜情報文化センター・ホール
 出演・水前寺清子、長山藍子（出演女優）
 石井ふく子（TBSプロデューサー）
 司会・八木康夫（放送人の会・TBS）

『ありがとう』は1970年から75年までの5年間、4部シリーズで放送された木曜日の連続ホームドラマ。制作はテレパックでホームドラマ全盛時代を代表する名物番組となり、視聴率は30%台を続け、中でも第2部での最高視聴率56・3%はいまでも不倒の記録として残る。『おぼけ番組』といわれるゆえんです。

開会挨拶で今野会長が「テレビドラマの神様」と讃えた石井ふく子さんは御年90歳で、今も多作の現役。看板スターの水前寺清子さん、長山さんを従え手を振ってのご入場に満員の会場は沸いて、一気になごやかなムード。BS12でタイミングよく始まった再放送（第3部）を観ている人が意外に多い様子。ドラマの骨格は、母子家庭の母と娘が周囲の人々との助け合いの中で明るく自立する庶民物語です。

さて、会場での上映は第2部の最終回、看護婦・愛（水前寺清子）があこがれの医師・元氣（石坂浩二）とゴールインするシンデレラストーリー。日頃は意地を張り合う母親



（山岡久乃）と娘・愛の結婚前夜の巧みな水入らずのシーンに思わずシーンときたところで、舞台裏はなしのタイムに移ります。司会の八木康夫さんは「雲の上の先輩は放送人の会の創立以来の会員、私は最も新しい入会者。司会役も初めてで」と緊張気味。

八木「企画のいきさつは？」

石井「『ありがとう』という言葉が好きなのと、時代の相は家族関係にも反映するという信念がありと互いに感謝し合える身近な日常が大切と思いい、脚本の平岩弓枝（作家）に相談して」

八木「水前寺さんを主役に抜擢したのは？」

石井「全くの新人でやりたいと探していた時、たまたま彼女が司会する番組を見て、『この人だ』と直感した。売れっ子歌手と知らず、ダメといわれるのを何度も自分で追っかけ、直談判し、最後はあなたがダメならドラマは中止すると本気でいった」

水前寺「歌で超過密スケジュールだったし、ドラマの自信もなかった。どうして私か不思議なので、経験もなく美人でもないのになぜ？』と伺ったら『だからいいの』といわれて……」

石井「私は思い込み屋でした。どの役であれ、意中の人に受けてもらえないと作る気がしない。ムチャクチャよね」

八木「だから石井ドラマはいつも豪華キャストになつて、驚かされるんですね」

長山「私は『女と味噌汁』からずっと使っていた。ただいてるけど、やっぱり『美人でない』からいい』といわれ続けて……」

水前寺「いや、あなたは私に較べれば美人よ」

長山「逆でしょ、鼻は低いし、オタフク顔だ

し他に取り柄といつて無いし……」

水前寺「取り柄でいえば、私は演技力すら……」

と、ここで石井さんから鋭い突っ込み、

石井「取り柄がないのに私が使う筈ないでしょ！」

に、会場爆笑。さすがは不死身の氣迫です。ここから先は、老齡の石井さんの氣遣いもあつて、長山、水前寺がドラマの世界そのままでの、テンポと間の絶妙な丁々発止の掛け合いを続け、会場を笑ませます。錚々たる出演者間の毒のない裏話も笑いの内に堪能。やっぱり伝説になるほどのビッグドラマは、制作過程の濃さも違うものだ、感心し納得の空気が漂います。

会場との質疑応答もなごやかに済んで、

八木「最後に一言ずつお願いします」

水前寺「このドラマの経験は私の『宝物』。今の私の原動力。忘れないため、再放送もせつせと録画して見ている」

長山「今日、この場で思ったのだけれど、互いに『ありがとう』と心から言い合えること、今もドラマの最大のテーマといえるかも、ね」

石井「そう、今の世の中やさしさに欠けてきている。他人へのやさしさが欠け、やさしさに感謝する気持ちも欠けている。私はこれからも人間関係の大切さを見詰めるドラマを作っていきたい。やりたいことだけやっていきたい」

（鈴木典之記）

第19 回放送人の世界

堀川とんこう ～人と作品～

今回の「放送人の世界」は、山田太一氏と組んだ新作「五年目のひとり」の放送当日と翌日という絶妙のタイミングで、上智大学を会場に行われた。「五年目のひとり」は、放送人グランプリを始め数々の賞を受賞した「時は立ち止まらない」に続く東日本震災後の現実と人間の心を見つめた作品である。

まさに現役の堀川とんこう氏であるが、長いドラマ制作の歴史のなかで、今回は主としてターニングポイントともいえる50代の作品を視聴し、司会の今野勉会長、学生代表益子美琴さんと共に真に興味深い「二本の木」の話等も聞くことができた。

19日のスタート作品は「モモ子シリーズ」の第1作となる「12年間の嘘と乳と蜜の流れる地よ」である。TBS「ザ・サスペンス」枠で企画したドラマで、殺人事件に巻き込まれるソープランド嬢という形を取っているが、内容は実際に起きたサラリーマンの妻殺しの悲劇を扱ったものである。清純派の竹下景子がソープ嬢を演じるという話題性もあって驚異的な視聴率を記録したため、脇役だったモモ子を主人公にして連作し、8年間に8本制作された。この作品も含めて今回取り上げた作品はいずれもPとDの兼任作品。独自の視点で制作者として一貫してひとつの世界を開拓してきた。

堀川「……この時期もつばら2時間単発ドラマをつくったが、これが案外おもしろくて、10年間かかわった。視聴率を稼ぐものと、少し勝手にやるものと区別して、両方を作るよう

心掛けた。」後者の代表ともいえる池澤夏樹原作筒井ともみ脚本の「ステイル・ライフ」は第2日のスタート作品である。二人の女性の奇妙な「同居生活」を描く。

堀川「教養をとれるようになってきたので、思い切って我儘したこの時期最も難解で観念的。疲弊した自分の心が洗われる位重要なものかも。自分のものとしてドラマをやりたいかった。」原作は男性が主人公、ドラマ化に当たってはタモリに出演交渉したが、実現できず、女性二人を起用することにより道が開けたという。「原作者はどうでしたか」という益子さんの質問に対しては、池澤さんは長い沈黙の後「それはおもしろいかも知れない」と一言。男性だと透明感が出ていく。田中裕子、南東歩の演技は浮世離れていましたという。

この作品では並んで立つ二本の木が象徴的な使われ方をしている。二人の女性の背後の絵の中に描かれ、燃やされたピアノの背後の二本の木の实景でドラマは終わる。スタッフと共に駆け回りやつと見つけた、そそり立つ二本の木である。

今野「世界と自分：二本立っている。世界はテレビの世界。常に並び立っているもの。堀川さん自身の人生のありようは？」



堀川とんこう氏



司会 今野勉氏



学生代表 益子美琴さん

堀川「テレビと自分に軋轢があった。つもりつつもできてこのままテレビの仕事をやったほうがいいか悩んだ。テレビは自分を入れる容器ではない、と考えるとさっぱりした。フランスの詩人の言葉：作者が作品の結果である。作ってきた沢山の作品が自分を作っていると考えようになった。」

この後「或る小倉日記伝」「父系の指」と松本清張作品のドラマ化作品を視聴。清張作品を各局競うように制作した中で、人気原作ものとは距離を置いた独自の清張ものを堪能できた。小倉日記は原作者の空白の小倉時代を体の不自由な青年が追いかけていくもの。それを見守る母の愛の優しさが胸を打つ。映像化不可能と言われたこの作品から「父系の指」と繋がっていく。「父系の指」は私小説的な短編やエッセイ他から、作者の少年時代を描いたものだが、貧困と戦う鬱屈した心理を鋭く描きだした力に圧倒された。まさに「弱者に対する優しさ」等の作者の原風景であり、それと対峙する演出家の姿がある。

この後会場からの数々の質問に答えたが、「自分の思いを大事にしよう」という堀川さんの若い制作者への熱い思いに胸を打たれた。(吉田賢策 記)



学生と放送人の会会員との交流会
四谷しんみち通りの居酒屋で



会員名簿

2016.11.18 現在

【あ】 藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 秋田和典 秋山豊寛 天野澄範 兩宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 石原信和 磯智明 磯野恭子 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭 【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふさ子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 大多亮 太田昌宏 大原れいこ 緒方陽一 岡野真紀子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野瞭 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 河村正一 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山紳人 近藤一男 近藤邦勝 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐野有利 澤田隆治 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暎子 白井博 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則 広 田原茂行 【ち】 崔銀姫 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暎子 戸田桂太 外崎宏司 豊原隆太郎 【な】 長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島 僚 中島由貴 中田美知子 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】 信井文夫 延江浩 【は】 萩原豊 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 松前洋一 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 南謙 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鏡一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】 八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

訃報

近藤賢さん 2月2日、誤飲性肺炎で死去享年87 57年NHK入局、「黄金の日々」「獅子の時代」「山河燃ゆ」など多くの番組を制作。NHK退職後東北新社クリエイツ社長。企画プロデューサーとして広い分野で活躍。放送人の会会員に知人が多い。

新人会員紹介（入会日順）

長井展光（ながいのぶみつ）59年4月生。73年毎日放送入社。アナウンサー、報道記者、マニラ支局長、メディア開発部などを歴任。メディア、デジタル化を担当。現在毎日放送経営戦略室エグゼクティブ。共著「送りのメディアアリテラシー」

板谷駿一（いたやしゅんいち）40年12月生。NHKで教養番組、報道番組、NHKスペシャル、衛星放送局などを担当。専務理事、放送総局長。NHKエンタープライズ。

藤田知久（ふじたともひさ）63年10月生。74年CAL入社。企画制作部門担当。執行役員、企画制作部長歴任。TBS月曜8時枠ナショナル劇場「水戸黄門」「大岡越前」「江戸を斬る」他に30年以上携わる。三谷幸喜作品を多数プロデュース。WOWOW開局20周年記念番組「三谷幸喜「Short cut」で民放連テレビドラマ部門最優秀賞受賞。現在OHC社外取締役、明治座テレビ室プロデューサー。

編集後記▼「放送人の証言」集に興味を持ち、放送人という人種の発想や思考回路にはレヴィ・ストロース（民族学者）のいう

（野性の思考）に通い合う神秘的革新性があると指摘したのは、東大情報学環の石田英敬教授でした。当会との共催講座での発言です（会報59・65号参照）。

暮にNHKで放送された「100分de名著」の「野性の思考」解説を聴いて、石田氏の関心が（学術研究の主流をなす）西欧流科学的進歩主義を描きざる未開社会的思考と行動様式への驚きにあることがわかり、氏の着眼と好意に納得がきました。

がしかし、同時に、近頃の放送人は魂となる肝心な（野性の思考）の感性と実践力を失ってしまっているのではないかと反省の念も刺激され、あれこれ考えて正月を過ごすことになりました。

年明けの気分は「鬱」の一字です。（典）

▼今年春が1月28日、今頃年頭所感をみるのはさすがに遅い感じがしますが、放送人グランプリのスケジュールを考えると会報の発行はこの時期になってしまっています。ご寛容のほどを。ノミネートをよろしく▼講談社の決算が今期久しぶりの増収増益で全社員に金一封が支給されました。「逃げ恥」など少女コミックが業績好調の理由です。少女コミックは今期テレビドラマにも大きな影響がありました。つい先日前までF1、F2を狙っても視聴率は取れないと言われたはずですが、どうなったのでしょうか？下馬評座談会を読みながらそんなことを考えました▼磯村健一さん、大蔵雄之助さんからハビロ中との葉書をいただきました。渡辺紘史さんは手術。みなさんくれぐれもお体をたいてつになさってください。（視座）